
境界線の上の魔女

一文字 煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線の上の魔女

【Nコード】

N4672M

【作者名】

一文字 煉

【あらすじ】

魔女狩りの対象となった村から逃げのびたアニタは、たどり着いた村で無免許ながら医者となる。数年後、村に大怪我をしたルークという人物が運び込まれるが、アニタの治療により一命をとりとめた。ルークが目覚めると、アニタはこんな場所に留まっているべきではないと言い、医者になるための推薦状を書くので着いて来いと言う。当初は難色を示したアニタだが、フランの言葉を聞き夢を叶える為に村を出る決意をする。

序章（前書き）

第17回電撃大賞応募作品です。

一次落ちの作品なので過度な期待はしないでください。

応募した作品をそのまま掲載していきます。

一切手を加えないので、賞に応募しようと思っている方は悪い部分を探して同じ過ちを犯さないようにしてください。

序章

耳を突き刺す嫌な音が聞こえた。

ガラスを引つ掻いたような、本当に嫌な音。

少女はゆっくりと目を開ける。

聞こえてきたのは不快な音ではなく悲痛な叫び声。

少女は飛び起きて窓の外を覗き見る。

そこに広がっていたのは地獄絵図。

甲冑を纏った兵が剣を振り槍を突く。

村一体を紅蓮の炎が包み、家屋は焼け崩れ空は赤く染まる。

男は容赦なく殺され、女は所構わず乱暴されていた。

少女は恐怖のあまり声も出せないまま身を潜める。

お願いだから見つからないでと。

これが夢でありますようにと、願いを込めて。

しかし、そんな願いも虚しく少女は見つかり家から引きずり出されてしまう。

連れて行かれた場所には村の若い娘が多数集められていた。

女が逃げ出さないように場を監視する兵は、どれもニヤニヤと気持ち悪い表情を見せる。

ひとしきり遊んでから売り飛ばすか、それとも魔女として殺すかそんな会話をしていることから、品定めでもしているのだろう。

自らの快楽と欲求を満たすためだけに。

兵の話を聞いた少女たちは、身を震わせ涙を流す。

皆が思った。

誰も助けに来てはくれないと。

だが、助けはやってきた。

腕に自信のある村の男が兵から奪った剣を振り回し、槍を掲げながら。

男たちは想い人の名を叫びながら言う。

お前たちだけでも逃げてくれと。

しかし、恐怖に身を竦ませた女たちは動くことすら出来なかった。けれど、それも一瞬のこと。

一人の女が声をあげ走り出すと、一人また一人とそれに続く。

兵たちの顔には焦りの色が浮かび上がり、男たちは安堵して息を吐く。

少女が覚えているのはそこまで。

あとの事は覚えていない。

他の皆がどうなったか解らないし、男たちがどうなったのかも解らない。

他の人間を心配する余裕などどこにも無かったから。

第一章 01

「これとこれを朝晩二回飲んでくれれば、数日で治ると思います」
村の外れにある老婆の家で診療をしていたアニタは、老婆に二種類の薬を渡す。

一つは熱を抑えるための薬。もう一つは頭痛を抑えるための薬。
日常の診察には含まれていないコースだが、老婆が倒れたと聞かされたからには来ないわけには行かない。

アニタはこの村で唯一の医者なのだから。

「いつも悪いね。こんな田舎の村じゃお医者様も来るに來られないし、アニタちゃんがいてくれて本当に助かるよ」

「大袈裟だよ、お婆ちゃん。私だってこの村でお世話になってるんだから」

にこにこと笑う老婆にアニタもにこりと微笑み返す。

アニタが村にやってきたのは二年前。川辺で気を失っていたところを村の老人に助けられた。当時は体中傷だらけのアニタを見て、誰かに追われているのかもしれないと腫れ物を触るように扱うものが多かったが、今となっては村中探してもそのような人物は一人としていない。

最初は皆が驚いたが、慣れてしまえばどうと言うことは無い。たとえ資格を持っていないとしても、アニタの医療技術・知識は資格を持つ者のそれを大きく上回る。一人、また一人と治療していくうちに、アニタに対する不信感の薄れ村の人たちは次第にアニタを頼るようになった。

そのおかげで、アニタは毎日忙しく村中を駆け回っている。

「それより、ちゃんと寝てないとダメだよ。無理して動いたら余計に悪くなっちゃうから」

「ありがとうね」

「どういたしまして」

アニタはにこりと笑いながら使っていた乳鉢を軽く掃除する。もちろん溝に残った薬草の残りがすも棄てはしない。少量が積み重なり、それが一回分、十回分と回数を重ねることに増えることをアニタは理解しているから。

机の上に出していた道具と薬草をウエストポーチの中にしまうと、アニタは老婆に一礼し次の患者の下へ向かうべく家をあとにした。

天気は良く、心地よい風が吹き抜ける。冬が近づいているにしては暖かく、屋外でのんびりするには絶好の日和だ。アニタは日差しを遮るように手を掲げる。

「眩しい」

ウエストポーチから帽子を取り出したアニタは、いつものようにそれを深く被る。別に日の光が眩しいからではない。人見知りの激しいアニタは、直接人の目を見て話をするのが苦手だ。患者の家にいるときに限りきちんと表情を見る為に帽子を取っているが、それでも目を完全に隠すほど伸ばした前髪の間隙から覗き見る程度。正面から目を合わせて話せる相手など数えるほどしかない。

帽子の位置を整えると、アニタは次に診る患者の家へと歩みを進める。

村で一番大きな道は碎石を突き固めたもので舗装されている。けれど、道を少し横にそれると土がむき出しになった自然道。草木が刈り取られ人の進むための道として形を成しているが、数ヶ月も放置し続ければ獣道へと姿を変える。アニタが今歩いている道も、しばらく手入れがされていなかったのか、何の役にも立たず一般人なら名前も知らないであろう草が道の占拠を始めていた。

とはいえ、背の高い草木が生えていないため視界はとても良い。

村の敷地が広大なため中心部に民家が固まっているが、アニタがいる場所は中心部から離れた場所。手入れされている部分の方が少なく、野生の動物も多くは無いが見ることが出来る。しかし、そんな見晴らしも良く気持ちのいい場所であっても、アニタの診察周りが楽なものかといえば決してそうではない。

腰に下げたポーチにはいくつもの道具と薬草が詰め込まれており、十代の少女が持つにはお世辞にも軽いと言える代物ではない。そんなものを持ちながら、アニタは舗装されきっていない道を毎日三時間歩いている。

持病を持った老人の家を回り、怪我人や急病の患者が出ればそこに駆けつける。大変で無いと言えは嘘になるが、アニタは今の生活が好きだった。身寄りもなく、素性もわからない自分を、快くとはいえないが迎え入れてくれた村人たちをアニタは好きなのだ。

だからこの程度の事を苦労だとは思わないし、面倒だとも思わない。一日の大半が、自分のためではなく村人の為に使われていようとも。

老婆の家を出てから十数分後、アニタは次に予定していた患者の家に到着する。

アニタは患者から症状を聞き、触診して容態を見る。どこが悪いのかを確認すると、病状にあつた薬を作るため数種類の乾燥させた薬草と、液体の入ったビンポーチから取り出し机の上に並べた。

順番は大切だ。間違えてしまえば、薬草同士が反応を起こし別の効果を持つ薬へと変わってしまう。順番と量を間違えないよう、アニタは慎重にそれらを調合していく。

そうして出来上がったのはドロドロとした緑色の液体。鼻を突くようなきつい臭いが何とも言えない。これを飲めと言われれば十人が十人難色を示すことは間違いない。

アニタが差し出した薬を見て、患者の男は顔を引きつらせる。

「ア、アニタちゃん。まさかとは思うが、これを飲めとは言わんよな？」

その問いにアニタは固まってしまふ。まさか、飲み薬と言われるとはこれっぽっちも思っていなかったから。男に悪いと思いつつ、アニタは小さく笑いを漏らす。

「飲めなんて言いませんよ。私だってこんなもの飲みたくありませんから」

「それを聞いて安心した。じゃあ、これはどうやって使うんだい？」
「それはですね」

こほんと咳払いをし頬を朱色に染めると、アニタは男が腰を付けていたベッドに男を押し倒す。そして男が着ている上着を無理矢理脱がしだした。

「ちょ、ちよつとアニタちゃん！　いくら小父さんが素敵だからって」

四十を超えた中年の男が十代半ばの少女に迫られた時の反応としては当然のもの。だが、アニタは淡々とした口調で言い返す。

「何を言ってるんですか。早く服を脱いでうつ伏せになってください。薬が塗れないじゃないですか」

アニタは話しをするのが得意と言っわけではない。むしろ苦手なほうだ。飲み薬を処方する場合は、飲む時間と回数を教えなければいけないためきちんと説明するが、塗り薬の場合はそうでない。説明するよりもやったほうが解りやすいだろうという独自の解釈の元、慣れ親しんだ相手には今回のような実力行使に出ることも少ない。

男が服を脱ぎうつ伏せになったことを確認すると、アニタは男の腰にペタペタと薬を塗っていく。薬を塗り終わると、べた付いた手を拭き薬の上に布を貼り付ける。そして、布が取れないよう腰全体を包帯でぐるぐる巻きにした。

「これで、よしっ」

男は持病を持っており普段から足を運ぶ事は少なくないが、今回の病状はただの腰痛。もっと道具があればここまで大袈裟に包帯など巻く必要は無いのだが、この村に医療道具を取り扱っている店は無い。アニタが使っている道具でさえ村の若者が近くの町に出かけたとき、ついでに買って来てもらっている物ばかり。贅沢を言えばきりが無い。とはいえ、この場で可能な最善の処置が出来たことにアニタは満足気な笑みを浮かべた。

「ところで小父さん」

アニタはきよきよと家の中を見渡すと、小さく溜息をついて続ける。

「フランは今日も森に行ってるんですか？」

「ん、ああ、そうみたいだな。朝からいないよ」

「まったく……」

ここ数ヶ月、怪我ばかりしてくると思えばやはりそうだった。

村の端から歩いて一時間ほど行った場所にある森は、狼や熊を筆頭に他の地域では滅多に見る事の出来ない魔獣などの凶暴な獣が多数存在する。人が足を踏み入れれば死ぬことも珍しくない。そんな森に、フランが何の用事で行っているかアニタは知っている。

アニタではいけない森の奥まで入り込み、珍しい薬草や道具として使えるものを数多く取ってきてくれる。気持ちは嬉しいが、それで怪我をされていては本末転倒。医療に関わるものとして、森で大怪我をして来たことのあるフランには森へ行く事を禁止している。

それなのにフランは毎日のように森へ通い傷を増やしてくるのだ。言うことを聞かないフランの事を考えアニタが憂鬱そうな顔を見せると、男は微笑ましそうな眼差しを向けてきた。

「フランの奴も隅におけねえな。アニタちゃんにこんな顔させるなんてよ」

「どんな顔ですかそれは。毎日傷を増やしてくるんだから心配するのは当たり前です」

いくらフランが強いといっても、相手は言葉も通じない獣ばかり。心配をするのは、医療に関わるものとしても友人としても当たり前前なこと。

「当たり前ね。けど、それでもフランは喜ぶだろうぜ。あいつはアニタちゃんのことが好きで好きで堪らないみたいだからな」

がははと大声をあげて笑う男を見て、アニタは呆れて息を吐く。

色恋沙汰に興味が無いかと聞かれれば、正直なところ興味はある。来年には十七になるし、特定の相手がいれば結婚してもおかしくは無い年齢だ。

しかし、今のアニタにそんな余裕は無い。

村にあと一人、まともな医療技術を持った人物がいれば、プライベートに割く時間も取れる。だが、そんな人物が現れる見込みは今のところ存在しない。その上、村の子供たちもアニタの生活を見て医者になりたいなどとは思ひもしないだろう。ようするに、アニタがプライベートな時間を作るということは、村の病人や怪我人を放ったらかしておくことに他ならない。

そんな事をアニタが考えていると、いつの間にか男はベッドの上から姿を消し調理場で何かを作り出していた。

「それよりもだ……今日はこれで終わりかい？ 他に回るところがないなら、飯でも食っていきな。調度昼時だし、腹も減ってるだろ」「お気持ちは嬉しいんですが、まだ回るところがありますので」

昼食をまともにとれないのはいつもの事。それに、このあとも二軒ほど診療に回らなければいけない。男からの申し出をアニタは丁重に断った。断ったのだが、男はそんなことお構い無しに大きな笑い声をあげる。

「遠慮なんかしないでいいぞ。すぐに作ってやるからそこで待ってな」

男の性格上、動き出してしまうと何を言っても無駄な事を知っているアニタは諦めて席に着く。そして、男が振舞ってくれた料理を有り難くもらうことにした。けれどその食事中、フランはここが凄いだのあれが凄いだのと息子の自慢話を延々と聞かされることになったアニタは苦笑いを浮かべた。

それからしばらく、フランの父親から強引な足止めを受けていたアニタは、どれぐらいの時間無駄話をしていたのだろうと思ひ窓の方へ目をやった。窓から差し込む光は大きく向きを変え、最低でも二時間近い時間が経っていることをアニタに告げる。

いい加減にここを出ないと、今日回るべき場所に回れない。そう考えたアニタは口を開こうとした。けれどそれは、突然の来訪者によって遮られてしまう。

扉を蹴破るようには開けやってきたのは、ハウエルという村の青年。全力で走ってきたのか額からは汗が流れ落ち、息の切れ方も尋常ではない。

これはただ事ではないと、アニタは帽子を被ることすら忘れハウエルに問いかける。

「何かあつたんですか？」

「ああ。旅人だと思っただが、酷い怪我で、かなり深い傷もあるみたいだし、俺たちどうしたらいいかわからなくて」

気が動転しているのか、それとも疲れで上手く話せないのか。ともあれ、ハウエルの様子から一刻を争うことは間違いないだろう。アニタは机の上に置きっぱなしにしていた道具や薬草を乱雑にウエストポーチへ投げ込み、ハウエルに問いかける。

「場所はどこです？」

「東門だ」

それだけ聞くと、アニタは走ってフランの家から飛び出そうとした。しかし、アニタの腕をハウエルがしっかりと掴み離さない。

「離してください。手遅れになったらどうするんですか」

腕を掴まれたアニタはハウエルを睨みつけながら必死で振り解こうとする。だが男の力に勝てるわけもなく、どんなに頑張ってもハウエルが強く握った手を振り払うことが出来ない。

「もうすぐ、馬が来る。だから待ってくれ！　その方がアニタちゃん走るより早いだろ」

時間の経過により落ち着いたのか、アニタの様子を見て自分が落ち着かなくてはと思ったのか定かではない。けれど、ハウエルの表情は駆け込んできたときとは全く別のものだった。

確かに、東門から走ってきたのなら馬を借りてからここに来るより、誰か一人が馬を取りに走りもう一人が状況説明をするほうが確実。それに、この付近で馬を飼育している人物に借りるとしても、この家から東門の間ではなく西門との間にあるのだから結果として走って行こうが馬を待とうが到着時間はさして変わらない。

しかし、だかららといって、じっと待っていることなどアニタには出来ない。

「けど、じっとしているなんて」

「アニタちゃんが疲れて動けなくなったら意味が無いだろ」

お願いだから行かせて欲しい。その言葉は出せなかった。

ハウエルが怒鳴りつけてきたから怖かったというのもある。だが、それ以上にハウエルの言うことがもつともだったから。

いくらアニタが全力で走ろうと、馬が追いつくまでに怪我人の所に行くのは時間的に見ても不可能。万が一たどり着けたとしても、全力で十分以上走り続けた直後に適切な診断と処置が出来るかと聞かれれば怪しいものがある。アニタは唇を噛み締め、馬がやってくるのを待つことにした。

それから数分、馬を借りに行っていた男も全力で走っていたのだろう。全身に汗を滲ませている姿を見ればどれだけ必死なのかは容易に想像できた。

「悪い！ 遅くなった」

「十分早い。もう少しかかると思ってた」

「そう言ってもらえると助かる」

そこまで言って、馬に乗ってきた男はずるりと地面に転がり込む。「けど、もう限界だ。アニタちゃんはお前が送っていつてくれ」

男の言葉に頷くと、ハウエルはすぐさま馬に乗る。そして、アニタにも早く乗るよう声をかける。だが、アニタは馬に乗るのを躊躇わずにはいらなかった。

確かに遠くの怪我人は優先して助けなければいけない。けれど、疲れているだけと解っているにしても、目の前の男を放っておくのはどうかと考えたからだ。

そんなアニタに気がついたのか、仰向けになって倒れている男は笑って言う。

「俺は少し休んで、水でも飲んでりゃ大丈夫だから」

男の言葉を聞き、アニタは馬に飛び乗った。心配で無いと言えば

嘘になるが、それでも男の苦労を無駄にはしたく無いと思ったから。
「ちゃんと掴まっててくれよ。こいつには無茶させるが、思いつき
り飛ばすから」

「はい！」

アニタが返事をする、馬は勢い良く走り出す。それと同時に、
アニタは疲労で倒れこんでいる男に声をかけた。

「ちゃんと安静にしててくださいね」

その言葉に男が手を上げると、アニタは安心してハウエルの腰に
手を回した。

第一章 02

東門にたどり着くと、そこには人だかりが出来ていた。

馬から降りたアニタは、人ごみを掻き分け患者の元へ駆け寄る。

そこでアニタの目に飛び込んできたのは、村では見たことも無いほど重傷の患者だった。

右手は焼け爛れ、両足は獣にでも喰われたのか見るも無残な形をしている。本来なら既に死んでいてもおかしくないような傷だが、最初に発見したものが施したであろう応急処置によって何とか一命は取り留めているようだ。

「この人を最初に見つけたのは誰ですか？」

どのような状況で倒れていたのかを聞く為、アニタは集まっている村人に問いかけた。すると一人の少年が名乗りをあげた。

「俺だよ。森を出たところで狼に襲われてた」

それを聞いてアニタは納得する。フランならばこれぐらいの処置はするだろうなど。

止血をする為、かなりきつく結ばれたロープは患者の皮膚に食い込み皮膚を擦りむいている。だが、これぐらいきつく縛っておかないと、完全に血を止めることなど出来なかったはず。日頃から怪我ばかりしているのも少しは役に立つものだ。そんな不謹慎な事を考えつつ、アニタはフランに言う。

「面倒ついだと思って、ひとつ走りしてきてくれる？」

普段は逆立てている髪が所々降りており、自慢のジャケットも血まみれ。肌には血をふき取った跡が見られ、着ている服も血と汗でかなり濡れている。察するに、ここまで怪我人を一人で運んだのだろう。かなりの労力を消費したと簡単に見て取れる。

しかし、アニタが今この場所で一番頼れる人物はフランなのだ。

「なんだよ？ 言ってみろ」

「私の家に行つて、道具棚の左から三列め上から六番目の物と、右

から二列め下から二番目と五番目の道具。あと、薬棚の右から二列め一番上と上から三番目、一番左の列の上から三番四番七番の薬持って来て」

「はあ？ 何でそんなもんを俺が……他の奴に行かせればいいだろ」
作ったような顔で面倒だというフランを見てアニタは怒鳴り声をあげた。

「フランは誰より早く走れるでしょ！ ゆっくり待ってる時間なんて無いの」

するとフランは頭を掻いたあと、仕方ないと言ってアニタの持つてきて欲しいと言った物を復唱する。そして、アニタが小さく頷くと邪魔になるジャケットをその場に置き、アニタの家に向かって走り出した。

フランが行った事を確認すると、アニタは再び声をあげる。

「誰か近くに家のある人は家を貸してくれませんか？ ここでは治療できません」

その言葉に村人たちは躊躇うことなく手をあげる。俺の、私の家を使ってくれと。

アニタは治療場所の確保が出来たことにひとまず安心すると、次に担架を用意してくれとお願いする。だが、それは願う必要も無いことだった。村人たちもこの場所で治療することは出来ないだろうと思っただけらしく、手の空いている者が担架を取ってきていたのだ。

アニタは村の人たちに感謝する。まさか現場についてこれほど迅速に事を運ぶとは思ってもしなかったから。

患者を担架に乗せると、アニタは指示を出す。

なるべく動かさないように、なるべく揺らさないようにと。

しばらくして、患者を乗せた担架は最寄の家へたどり着く。そこでアニタは家の中に入ると、持ち主に許可を得て家具の位置を変えた。

部屋の中央に食事をするための大きな机を配置し、その隣には机

と同じぐらいの高さの棚や木箱の上に置いた椅子を幾つか並べる。机の上に綺麗な布巾、棚や椅子の上にはポーチから取り出した道具や薬草、液の入った小瓶を並べていく。

フランが来るまでに出来る準備を終えたアニタは患者を机の上に運ぶようお願いする。そして、患者が机の上に置かれると、アニタは触診を始める。

当初の見立てどおり、右手には大きな火傷がある。しかも、ただの火傷というわけではなく火薬か何かが爆発したかのように皮膚の一部を吹き飛ばしている。また、両足は見ただけで獣に食いちぎられたのだと解る状態。骨がむき出しになり、血管や神経はずたずたに切れている。

アニタは見た目の酷い場所から次々に患者の状態を確認していく。周囲からまったく声が聞こえないのは、周りの人物がアニタの手際に驚いているからか、それともアニタが集中しきっているからか。どちらにせよ、雑音が入ってこないことは幸いだった。

そして、怪我をしているとは思えなさそうな胸の辺りを触診し始める。患者の胸板には程よく筋肉がついており、怪我をしていない場所なら、指で押しても骨にあたりそれ以上進まない。けれど明らかにおかしい場所がある。それを感じ取ったアニタは顔色を変えた。骨が折れているだけならまだ良かった。だが、どうやら折れた骨がどこかに傷を負わせているらしい。腕などを含めれば他にも骨折している場所があるが、そちらを触ったところで患者は大した反応を見せない。

しかし、その一箇所だけは違った。意識を失っているはずの患者が、小さくうなり声をあげ呼吸が乱れる。

アニタはすぐさま机の上に並べた小瓶から一つを選択すると、中に入っていた液を布に染み込ませ患者の口元に当てる。液体の染み込んだ布を当てられた患者は少しの間うなり声をあげていたが、ある程度時間が経つと寝息のようなものを立て始めた。

アニタは患者の様子を見て一息つく。

正直な所、フランが戻ってくるまで出来ることは何一つ無い。正確に言えば傷口に薬草を貼り付けたり塗りつけたりすることは出来るが、今そんなことをしてしまえばフランに走ってもらっている意味が無くなってしまう。

フランが早く戻ってくるよう祈りながらアニタが待っていると、急に外がざわめき出した。どうやらフランが戻ってきたらしい。時間的に考えればありえない速さだ。

アニタは少しでも早く道具と薬をもらおうと家の外に飛び出ようとする。だが、それよりも早くフランは家の中に入ってきてアニタに袋を突きつけた。

「言われた物、持ってきたぞ」

額から滝のように流れる汗。切れた息。本当に全力で走ってきてくれたのだろう。アニタはフランに頭を下げると、すぐさま袋の中身を確認する。どうやらフランは頼んだ棚に入っていた物全てを持ってきたようだ。かなりの量が詰め込まれており、これだけでもそれなりの重量になる。

フランが持ってきた物を棚の上に並べると、アニタは家の中に居た村人に告げる。

「人がいると気が散るので出て行ってもらえますか？」

すると村人たちは顔を合わせたあと、文句を垂れる。どうやらアニタが治療をするところを見たいらしい。しかし、アニタにとってそれを見られるのはどうしても嫌だった。けれど、出て行けと強く言うことは出来ない。

出て行こうとしない村人を見てアニタは諦める。

これで、この村にいることはもう出来ないのだと。

アニタがそんな風に考え覚悟を決めたとき、不意にフランが口を開いた。

「もしもだ、アニタの気が散ってこいつが死んだら、てめえの家で人が死んだってことになるんだよな？ 嫌だね俺は。人が死んだ家

で暮らすなんてよ。化けて出られたら堪らん」

家の持ち主に向けてフランが言うと、家主も声をあげて皆を外へと先導し始めた。どうやら、自分の家で人が死ぬのは嫌らしい。

アニタはほつと胸を撫で下ろす。

皆が外に出たことを確認すると、アニタは治療に入ろうとした。

だが、フランが扉の前で仁王立ちしていることに気付き声をかける。

「フランも出て行ってくれない？　あまり見られたいものじゃないから」

けれどフランは動こうとすらしらない。それどころか、アニタにきつく言葉を返してきた。

「はあ？　別にかまわねえだろ。今までだって見てるんだしょ」

「それは……そうだけど」

「じゃあ問題ないな。俺はここにいる」

フランの言葉を聞き、アニタは俯いた。今までもフランが怪我をしてくるたびに治療をしているが、それはどこの医者でも可能な治療。

だが、今回は違う。

見せられるものなら見せて構わない。けれど、想像を超えた力を、技術を見た人がとる行動は決まっている。畏れ、恐怖し、畏怖の対象としてそれを見ることが。

卓越した技術は魔法と変わらず、知られざる知識は悪魔の知恵として認識される。

村人の半数以上が持っていた医療技術の高さゆえ、魔女の巣と呼ばれた場所。そこで神童と言われていたアニタが腕を振るえばフランがどんな反応を見せるかなど明らか。

本当は大きな声など出したくもない。

けれど、普通に言ってもフランは言うことを聞いてくれない。

だからアニタは声を振り絞る。

「出て行って……」

「ん、何て言っただんだ？」

「出て行つて！」

アニタが普段出さない大きな声を出したことに驚いたのかフランは一瞬目を見開いた。しかし、すぐに言葉を投げ返してくる。

「い・や・だ！」

悪いと思っっている様子はない。それどころか、フランの瞳は怒りの色で染まっている。

「気にしすぎなんだよお前は。見られたくないってのも、魔女扱いされるのが嫌なだけだろ？ そうだとしたら村の皆は悲しむだろうな。お前がクラフト村の出身だって解つてて一緒にいるんだから」

アニタは一瞬何を言われたのか解らなかった。

そのことを村の誰にも教えた事が無かったら。

「違う……私は」

一人になるのが嫌だったから。

魔女と言われることが嫌だったから。

それなのに、皆が知っているといるという。

いくら動揺を隠そうとしても隠せるものではない。

アニタは肩を震わせ流れ落ちそうになる涙を堪え、否定の言葉を口にしようとする。

「私は……」

「私は魔女じゃない。か？」

しかし、言おうとした言葉をフランに言われてしまい言葉が出ない。

「そりゃそうだ。お前が魔女であるわけがない。お前はただの医者なんだよ」

魔女ではなく、ただの医者。この言葉に我慢していたはずの涙が頬を伝って床へと流れ落ちる。けれど、その涙は先ほどとは全く質の違うもの。

肯定したわけではない。けれど、アニタがクラフト村出身の可能性があると知っているなら、一緒に暮らしている村の人たちは魔女隠蔽の罪に問われることになる。

それなのに村の皆はあれ程に優しくしてくれる。

泣かずにいられるわけがない。

アニタは溢れ出てくる涙を必死に拭い、フランに言った。

「見ても怖がらないでね。これが私の医術だから」

するとフランは小さく笑い頷いた。

「外の奴らに自慢しないとな。俺は奇跡を目の当たりにしたってよ」
冗談交じりのフランの言葉を聞き、アニタもにこりと笑う。

そして、アニタは患者へと意識を移した。

喰い散らかされた足は細胞がぐちゃぐちゃに潰れており、このまま治療が出来る状態ではない。いろいろと考えたいこともあったが、雑念が入り混じった状態で手術を成功させることが出来ないと考えたアニタは、周囲の情報を、自分の感情を完全に遮断した。

それから先は本当に手早いもの。

患者の足に麻酔針を刺すと、化膿を始めている部分を薄く削ぎ落とし、一瞬だけ両足を縛っている紐を緩める。すると、傷口の先で固まり栓をしていた血塊が取れ再び傷口から血が滲み出る。

だが、そんなことは気にも留めず、フランが持ってきてくれた道具から木の棒に巻かれた白濁色の糸を取り出す。そして、それを小さな針に結びつけ傷口へと運ぶと噛み切られた神経と神経を素早く繋いでいく。

両足の神経を繋げるのに有した時間は僅か十分。作業に一区切りをつけたアニタは小さく息を吐く。その後、針に結んであった糸を薄紅色の管へ切り替えると少しの間もおかず血管同士を結び始めた。細い血管と太い血管で管を使い分け、見事に血管を繋いでいく。

芸術的とも言える縫合が終わると、アニタは患者の足に結んであったロープを解く。

塞き止められていた血が一気に流れ、血の気を失い青くなっていた足に赤みが戻る。神経のほうは患者が眠ったままなので確認出来ていないが、少なくとも血管の縫合は上手くいったらしい。これで足の傷が原因で命を落とすことは無いだろう。

次にアニタは患者の右手へと視線を移す。

たしかに酷い怪我だが、それでも両足に比べたら程度は知れている。この程度ならしばらく放って置いたところで命に関わる程ではない。そう考えたアニタは視線を患者の胸の方へと移動させる。

麻酔のおかげで寝息をたててはいるが、やはり呼吸がおかしい。肋骨が内側に折れていることも考えると、肺に骨が突き刺さっている可能性がある。アニタは患者の胸を躊躇い無く切り裂いた。そこからは予想以上に大量の血が溢れ出る。

このままでは出血多量で患者が死んでしまうと思ったアニタは、簡単に止血をすると液体の入った袋に管を繋げる。そして管から液体が流れ出てくることを確認すると、それを患者の腕へ突き刺し、管から流れる液体が患者の体へきちんと入っていく事を確かめる。その後、アニタは再び胸の方へ視線をやる。

先程の血は、折れた骨が肺と血管を傷つけて流れ出たものが体内に溜っていただけのようだ。それが証拠に、先程のように血が一気に吹き出ることには無くなっている。

血をふき取り内部をよく見えるようにすると、患者の傷はアニタが思っていたよりも重症ではなかった。まず、肺に骨が突き刺さっている可能性があると考えたが、折れた骨が肺を圧迫しているだけで幸いにも傷は付いていなかった。とはいえ、数箇所血管が傷ついている場所があるのでその治療をしなければいけない。

患者が大事に至らないと確信したアニタは小さく笑みを浮かべる。骨折していた箇所は、骨を元の位置に戻し固定しておけば時間の経過と共に治っていくし、足の方も神経と血管の周りに筋肉が付いてくれれば日常生活に支障を及ぼすほどでも無い。問題はちゃんと筋肉が付いてくれるかどうかといったところだろうが、それはアニタがどうこう出来る問題ではない。

最後に右手。軽症ではなかったにしろ、こちらも日常生活に問題が出ることは無いだろう。しかし、ズボンで隠せる足や上着で隠れる胸とは違い、手は人目に晒されることになる。手袋か何かをして

いればそれも避けられるが、常に手袋をし続けているというのも怪しいものだ。下手をすれば悪魔憑きの可能性があるとして警備の者に呼び止められる可能性もある。そんなことを考えたアニタは、なるべく跡が残らないように注意を払いながら右手の治療を始めた。

第一章 03

手術を終えたアニタは額の汗を拭く。

これほど重症の患者を治療するのは久しぶりだが、想像していたよりも腕は鈍っていなかったらしい。時間はかかったがこれといった失敗はなく、手術は成功したといえる。

だが、安心するのはまだ早い。

傷口が完全に塞がっている訳ではない為、そこから菌が入る可能性もある。そうなれば、傷口が化膿するだけでなく感染症にかかるかもしれない。とはいえ、村では流行り病などもないし重い病にかかっている者もない。その事を考えると、本当に注意しなければいけないのは菌よりも虫の方だろう。

傷口が化膿したなら化膿を抑制する薬を塗ればいい。感染症にかかったなら抵抗力のつく薬を投与すればいい。けれど、傷口に虫が群がるようなことがあれば、せっかく治した足を切り落とさなければならぬ。

虫とは医療を心得ているものからすれば、もつとも忌むべき存在なのだ。

アニタは皿の上に乾燥した薬草を数種類乗せ、それを患者が眠る机の四隅に置いて行く。そして、薬草に火をつけた。しかし、薬草が火をあげることではなく、ぱちぱちと音を鳴らし燻された様に煙だけを吐き出している。

「ひでえ臭い……何だよそれ」

口と鼻を手で押さえ顔をしかめながらフランが言うと、アニタは苦笑いを浮かべる。

「虫除けと殺菌効果のある煙かな。しばらくはこの状態で部屋を保つてないと、傷口に菌が入ったり虫が寄ってきたりするから」

「にしても酷過ぎる……腐った卵の方がまだマシだぞ。てか、人に害はねえのかよ」

「害はないよ。ちょっと気分が悪くなるぐらい」

アニタが言うと、フランは小さく首を横に振る。微妙な反応を見せるフランを見てアニタは首を傾げた。だが、気にするほどのことでもないだろうと考えるのをやめ、机や台の上に並べてあった道具を器用にポーチへと詰めていく。

アニタは忘れ物が無いかを確かめ、残っているのが皿の上で燻されている薬草数種類だけなのを確認すると、ぽんぽんとポーチを叩いた。すると、それを見ていたフランの顔が先ほどの微妙なものから不可解なものへと変わっていることに気がついた。

「どうしたの？」

不思議そうにアニタが尋ねると、フランはポーチを指差した。

「それ、どうやってたら入るんだ？」

「どうって……普通に入るよ？」

アニタはポーチの入り口を広げフランに見せる。

道具や薬草が大量に入っているが、それぞれが場所分けされ綺麗に収まっている。アニタからすればおかしな所は何もない。けれど、フランは納得がいけないといった様子を見せつつ諦めたように口を開いた。

「そうだ……よな。道具の量がポーチの許容量より多いなんて事はないよな」

おかしなことを言うてくるフランを不思議に思いながら、アニタは家の外に出て治療が終わった事を告げる。しかし、どういわけか治療に興味津々だったはずの村人たちは、誰一人として家に近づこうとしない。

思わずアニタは考える。

フランはあんな風に言っていたけれど、実際それを目の当たりにすれば村の皆も考え方が変わってしまうかもしれない。そう思いながら、アニタは恐る恐る口を開く。

「あの、どうしたんですか？ そんなに遠くへ行って……」

すると返ってきたのは家主からの罵声と、それをからかう笑い声

だった。

「聞いてないぞアニタちゃん！ あんな臭いものを家の中で焚くなんて」

「諦める。ありや服も全滅だって」

「家具も全滅だろ。つーか家ごとダメじゃねえか」

そんな声を聞き、家主に悪いと思いつつもアニタはほつと息をつく。虫除けに焚いている薬草の酷い臭いに家主も怒っているような素振りこそしているが、表情を見れば怒っていないのは一目瞭然。アニタはそんな光景を見て思わず笑ってしまう。

「だから言っただろ。気にし過ぎだって」

叩かれた肩の方へアニタは視線を送る。

そこには、村の皆と同じように笑うフランの姿があった。

鳥たちの囀る声が聞こえ、窓から差し込む光が夜の終わりを告げる。

五日もの間ほとんど寝ずに煙の番をしていたせいで、いつの間にか眠ってしまったらしい。部屋の中に立ち込めていた異臭はいつの間にか無くなり、燻されていた薬草が燃え尽きたことを知らせてくれる。

机に倒れこむように眠っていたせいか、体が痛い。アニタは目を擦りながら起き上がると、ぼやけた視線の先に自分以外の人がいることに気がついた。

寝顔を見られたかもしれない。そんなことを考えたアニタの顔は一気に紅く染まり、恥ずかしさのあまりポーチの中にしまいこんでいた帽子を取り出し深く被る。そして、そつと視線を動かして誰が居たのかを確認する。

肩まで伸びた真っ直ぐな金色の髪に青色の瞳。男は体に包帯を巻きつけ、じつと足の方を眺めている。

今までは男が意識を失っていたから何も思わなかった。けれど、意識を取り戻したとなれば話は別。怪我の程度から動けないことは解っているが、それでも体が強張り声が出る。

小さく引き攣った声をアニタがあげると、それに気がついた男はアニタの方へと視線を移す。

「君が看病してくれたのかい？」

爽やかに笑う男の顔に敵意は無い。アニタは目を合わさないよう注意を払い帽子の隙間から男を見て小さく頷いた。

「そうか……ありがとう」

男は深く頭を下げ礼を言う。その言葉は、男を警戒しているはずのアニタが聞いて尚、本当に誠意の込められたものだと思ひに汲み取れた。だからアニタは反応に困る。

感謝の言葉をもらえることは嬉しいが、それが初対面の相手となればまともに顔など見ることは出来ない。どうしたら良いものかとアニタが困っていると、男の声が聞こえたからかどうかは解らないが、部屋の外で待機していたフランが扉を開け部屋の中に入ってきた。

「なんだ、起きてるじゃねえか」

逆立てた髪に鋭い目。クラッシュジーンズにジャケットを羽織り、腰のベルトには奇妙な鉄手甲をぶら下げているとなれば、好青年に見えるわけがない。下手をすれば悪党組織に組する構成員と間違われても言い訳は出来ないだろう。

そんなフランが睨み付けているのだから、男がまともに対応など出来るわけがない。アニタはそんな風に考えたが、男がとつた行動はまったく別のものだった。

「君は……」

そう呟いて一呼吸置くと、男はフランに向かって深々と頭を下げた。

「狼に襲われているところ助けただいて感謝する。私は、アルバート・リヴィングストン公爵の第二子、ルクレーシャス・リヴィ

ングストンだ。ルークと呼んでくれ」

堂々とした態度で礼を言ったあと、ルークは手を差し伸べフランへ握手を求める。差し出された手を見てフランは頭を掻く。そして面倒臭そうに、

「フラン・オルブライトだ。フランで構わない」

名乗りをあげたあとルークと手を交わした。

「いきなりで申し訳ないがこの治療は誰がしてくれたものなんだ？是非とも礼がいたい」

ルークがフランに尋ねると、フランはアニタの方を指差す。

「あいつが治したんだよ」

その言葉を聞いたルークの表情は驚愕と興味の入り混じった物へと変わる。アニタはそれを見て恐怖を覚える。

爵位の最高峰である公爵を与えられた者の息子。普通に考えれば規律などには厳しいはず。つまり、アニタの卓越した医療技術を魔術だの言い出しかねない。そんなルークが手術の痕を見てどんな反応をするのか怖くて仕方なかった。けれど、それは杞憂に終わる。「すごいな。私も医術を学んでいるが、こんな治療法は聞いたことも見たこともない」

そう言った後、ルークは饒舌になり語りだした。

「正直な話、あいつらに襲われたとき自分の死を覚悟した。運がよくても右手と両足は諦めなければいけないと。それがどうだ！？痛みは奔るが右手も両足も感覚がある。これほど喜ばしいことがあるか？ いや、無いと断言できる！ アスクレピオスの奇跡を体験したかのような気分だよ」

子供のようにはしゃぎながら喜ぶルークを見て、アニタは内心ほつとする。彼の出した名が、魔女を忌み嫌うものなら絶対に出すものではなかったから。しかし、フランはその人物を知らないらしく、眉を寄せルークに質問を投げかけていた。

「その、アクレスなんたらってのは誰なんだ？」

「アクレスじゃない。アスクレピオスだ。嘆きの魔女、殺戮の魔女、

蠱惑の魔女、など他にも色々と呼び名はあるが、一番有名なのはこれだろうな……境界線の上の魔女」

これならば知っているだろうと言わんばかりの顔でルークがフランを見ると、やはりというかフランは首を横に倒していた。それを見たルークは呆れながら口を開き、アスクレピオスについて語りだした。

「諸説あるが、アスクレピオスは百年程前に実在していた人物だ。当時では、いや、今現在の医療技術を持ってして到達できない境地に辿り着いた最高の医者。しかし、その技術の高さゆえ魔女扱いされ迫害された。上の人間がもっと柔軟な考えをしていたなら、今の医療技術など過去の遺物化していたに違いない。そもそも――」

さらに話を続けようとするルークに思わずアニタが割って入った。聞くのが恐くないわけではない。だが、これだけは聞いておかなければいけない。

「あ、あの……ルークさんは……その……アスクレピオスの事を魔女だとは思わないんですか？」

普通の者に聞けば皆が皆、アスクレピオスは魔女だと答えるだろう。

けれどルークは断言した。

「思わない。彼女は立派な医者だ」

アスクレピオスを医者だと言うことは、魔女という存在そのものを否定することに繋がる。すなわちそれは、上流階級の者や教会の者たちを否定することになる。その意味を解らないほどルークは馬鹿ではないだろう。つまり、これから先どんなことをルークが言い出したとしても、この場で魔女扱いされることはない。そう確信したアニタは、安心して胸をなでおろした。

しかし、それもつかの間。

直後、ルークからの質問にアニタは言葉を失う。

「そういえば、君は医師としての資格は持っているのか？ 失礼だが、その、とても十六以上には見えないんだが」

医師としての資格が無ければ医療行為をしてはならない。そんなことは誰だって知っている。まして、資格も無い人間が外科手術などしたと解れば、その人物は切り裂き魔と言われ裁きの対象になる。例え、どんなに優れた技術を持っていようと。

「黙り込む所を見ると資格は持っていないようだな」

アニタが資格を持っていないことを察したルークは口元に手をやり考え込む。そして、数秒の沈黙を経て突拍子も無いことを言い出した。

「君が良ければなんだが、街へ来ないか？ 推薦状の一つ書くぐらい訳は無い。それに、こう言ってはなんだが……君はこんな村で小さく収まっている人物ではないと思う。君の技術があれば、村の百人ではなく、大陸の一万、十万という人間を治すことが出来るはずだ」

ルークの言葉にアニタは驚きを隠せなかった。

推薦状を書くということは、医師としての資格を無条件に与えてくれるということ。もちろん、それが通るかどうかは推薦状を書く物の力量による所が大きい。けれど、伯爵の位を持つ子息の発言は軽いものではない。恐らくではあるが、無審査に近い状態でアニタは医師としての資格を得ることが出来るだろう。だが、それだけではない。アニタを過大評価しすぎていると言って良いほど、ルークはアニタのことを評価している。治療している姿を見たわけでもないのにだ。

いくらなんでも話が旨すぎる。

そう考え警戒しようとした時、アニタは思い出す。

自分の手足が無事だったことに喜んだルークが言った言葉を。

『アスクレピオスの奇跡を体験したかのような気分だよ』

クラフト村でも神経接合や血管縫合が出来るものは数少なかったが、全くないというわけではない。誰にも出来ないということは、その治療法が間違っているか手法の確立が出来ていないから。つまり、外地に同じレベルの治療を施せるものがいたならこの様な言い

回しをすることは決して無い。そう考えたアニタの脳裏には、最悪の事態が過ぎった。

高度な技術を持つ人間を魔女として迫害してきた外地の医療技術は、百年前からほとんど進歩していないのでは？ と。もしそうなのだとしたら、ルークがアニタを是が非でも連れ出したい気持ちは解らないでもない。

たった一人、卓越した技術と知識の持ち主がいるだけで、その分野は劇的に進歩を遂げることが出来る。ようするに、アニタがルークと街に行き、その技術と知識を広めれば、昨日までは助からなかった人間も助かるようになるかもしれないのだ。人を助ける医者という立場の者なら、これほど喜ばしいことは無い。

だが、アニタはすぐに答えを出すことが出来なかった。

確かに、自身の持つ技術や知識で大勢の人が助かるかもしれないというのは、名誉なことではある。けれど、決して大が小に勝ると言う訳ではない。

見知らぬ一万の人が、親しい百の人かなど、天秤にかけられるわけが無いのだから。

アニタはルークからの誘いに答えを出せず、その場で俯いて黙り込んでしまう。すると、ルークは申し訳なさそうに頭を下げた。

「すまない。君の気持ちをもっと考慮すべきだった」

「い、いえ、そんなことは……」

「では、私がここを出て行くまでにいい。答えを聞かせてくれなにか？ 決して無理強いはいしない」

自信に満ち溢れたルークに対し、アニタは俯いたまま返事をしない。

いくら考える時間をもらったところで、結果は変わらないのだから。

アニタがどうやって断ろうかと考えていると、突然フランが腕を掴み強引に引っ張ってきた。そしてアニタは訳がわからないまま部屋の外へと連れ出された。

外へと連れ出されたアニタは扉に押し付けられる。逃げようにも顔の横にフランの手が押し付けられ、とてもではないが怖くて逃げ出せる雰囲気ではない。

「ど、どうしたの？」

怯えながらアニタが問いかけると、フランは怒りの籠った口調で答える。

「どうしたのじゃねえ。何を考えてるんだお前は？」

「何って……言われても」

解るわけが無い。なぜ怒鳴られているのか、なぜフランが怒っているのかなんて。

泣きそうになるのを必死で堪えアニタはフランを見る。すると、フランは押し付けた両手をそっと下げ、アニタから視線をそらし辛そうに呟いた。

「何で行かないんだよ」

その言葉は予想外のものだった。

フランに行けと言われるとは思ってもいなかったし、こんな辛そうな顔をされるとも思っていない。そんなフランを見てアニタがどうして良いのか解らずにしていると、フランはアニタの方を向き何かを決意したかのような顔つきで口を開いた。

「お前の夢は不治の病を無くすことだろ？ だったら、このチャンス掴まないでどうするんだよ」

掴めるなら掴んでしまいたい。たったそれだけのことで数多くの人を助けることが出来るのだから。けれど、今このチャンスを掴むということは村を捨てて行くという事に他ならない。だからアニタは口籠る。

「でも……」

「でも、じゃねえ。俺が言うのもなんだけどな、あいつは信用していい奴だと思っ。少なくともお前を魔女扱いすることは無い。お前だって解るだろ」

「それは……そうだけど」

フランに言われなくても解っている。村の人たちは反対などないだろうと。けれど、それでも村の人たちを置いてなど行けるわけが無い。

「だったら行けよ。村の連中だって解ってくれるさ」

「けど……」

煮え切らないアニタへ、フランは怒鳴りつけるように質問を投げかけた。

「お前は、目の前にいる少し体調が悪いだけの人間と、手を伸ばせば届く距離にいる重症患者のどっちを優先するんだよ」

「そんなの手が届く重症患者に決まってる」

反射的に出た答え。だが、答えてからアニタは気がついた。フランの言う、目の前にいる患者が村の人たちだということ。そして、手を伸ばせば届く距離にいる患者というのは、ルークの誘いに乗れば助けられる人たちだと言う事。

それが、考えて出した答えではないからこそアニタは自分の本音を知る事になる。知り合いや知り合いでないかなど関係なく、より多くの命を救いたいという気持ちを。だからアニタは考えた。自分の気持ちに正直になるか、それとも義理を優先するか。

悩むアニタにフランは優しく告げる。

「だったら行つて来い。手の届く距離に、村の何十何百倍って数の患者がお前を待ってるんだから」

こんなことを優しく言われて気持ちに嘘をつけるはずが無い。

「そうだね…… フランの言うとおりだよ」

アニタは扉に手をかけにこりと笑う。そして部屋の中に入ると、静かに戸を閉めルークに話しかけた。

「ルークさん。先ほどのお話、前向きに検討させてください」

扉一枚。それだけでは会話を完全に遮断することなど出来ない。

アニタとフランのやり取りを聞いていたのか、ルークの表情に驚きの色は無い。

「いいのかい？ 私が村を出て行くまで考えてくれて構わないんだ

が」

「構いません。ただ……」

「ただ？」

「村の皆の理解が得られない場合は、この村に残ります」

するとルークの表情は怪訝な物へと変わる。

「それは何故だい？ 人の意見に左右されるのは決して良いことだと思えないが」

「そういうわけじゃありません。私は、この村が好きなんです。村の人たちが大好きなんです。だから、助けてもらった恩も返せないうちに出て行くななんて事は出来ません」

「なるほど……私の知らない事情があるということか。解った。どのような結果になるか知らないが、期待して待たせてもらう」

その言葉を聞いたアニタは、帽子を脱ぎルークに一礼して部屋を出る。すると、部屋を出てすぐの壁にフランがもたれてアニタが出てくるのを待っていた。それを見たアニタは、すんとその場にしゃがみ込みフランを見上げて作ったような笑み浮かべる。

「ははは」

ルークと話しているときは平静を装うことが出来たが、目の前にいるのは慣れ親しんだフランだけ。緊張して震えていた足からは力が抜け、立っていることもままならない。

「お前にしては良くやったんじゃないね」

そんな事を言って、フランはアニタが握り締めた帽子を取るとそれをアニタの頭の上に乗せ、ぽんぽんと頭を叩く。

アニタは両手で帽子を握り深くかぶりなおし、フランに気付かれないよう頬を染めた。

翌日、アニタはルークと話したことを村の皆に伝えていく。

もしかしたら反対されるかもしれない。アニタはそんな風に考え

ていたが、村の皆が門出を祝ってくれた。しかも嬉しかった事はそれだけではない。

自分の生活を見て、村で医者などやりたいものはいないだろうと思っていた。けれど、村を出てもっと多くの命を助けたい。そう告げた途端、アニタより小さな子供たちがアニタのようになりたいと言い出し、医学を教えてくれと言ってきたのだ。

これほど嬉しい事は無い。

自分のやってきた事が、皆に認められるのがこれほど嬉しい事だと知らなかった。

アニタは自分の持っている知識を少しでも教えようと、集めた医学書を全て子供たちに譲り、診察の合間を見ては色々と教え始めた。しかし、ルークが治るまでという短い期間であったため、アニタが直接教えられる事は多くない。村に生えている薬草の場所や、それを組み合わせて出来る数種類の薬の作り方ぐらいのもの。調合の難しい薬や外科手術などは教える時間が無かったから。

けれど、この期間はアニタにとって非常に充実した毎日で、本当に幸せなものだった。

第二章 01

「いつになったら着くんだよ。なんたらとか言う街には」

村を出たのは十日前。アニタがルークの話を前向きに検討すると
言ってから二ヶ月近くがたった頃。元々はアニタとルークの二人だ
けでレノンという街へ行こうとしていたのだが、アニタを男と二人
きりで行かせるなんて危険すぎると無理矢理フランが同行した。

とはいえ、アニタもルークと二人きりでは一時も気を抜く事が出
来ないので、フランが同行してくれ助かったと言えなくも無い。

そして、村を出て最寄の町ボルドに着いたのが八日前。それまで
が野宿だったため、たまにはベッドで思い切り眠りたいと言うアニ
タの希望で町の宿を取るようになった。それから先は村すらなく、
ただ目的地まで荷馬車を走らせるだけ。周りの景色を見てもこれと
いった変化があるわけではなく、見渡す限りの地平線。それを装飾
するように点在する枯れ木やごっこつした岩が、代わり映えない
風景を彩っている。

「あと三日もあれば着く」

することが無く暇すぎて耐えられないフランの愚痴に、ルークは
淡々と答えだけを述べる。無駄に会話しても口論にしかならない
事を、この荷馬車生活でお互いが学んだからだろう。犬猿の仲とい
うのはフランとルークのような関係をさすに違いない。

アニタは重苦しい雰囲気の中、流れる雲を見て気を紛らわせる。

この八日間、大きく天候が崩れることは無く雨が降ったのも一度
だけ。それも小雨だったのだから運が良いと言えば良いに違いない。
そのおかげで、宿も無い平野で寒さに震えることが無いのだから。
しかし、フランとルークが口論を始めれば雲を見ているぐらいで
気は紛れない。

勝気なフランと負けず嫌いなルーク。

お互いが言い出したことを譲ることは無く、互いが納得するまで

一つのことについて、いつまでも言い合いをする。その結果、最終的には二人ともが実力行使に出ようとすることからたちが悪い。フランは格闘戦に置いて最強を自負しているし、ルークも射撃の腕なら誰にも負けないという。

事実、フランは獣や魔獣だらけの森に何度も足を運び多少怪我をする程度で帰ってくるし、ルークは利き手とは逆の左手で百メートル先にある銅貨を打ち抜く程の射撃の腕前を持っている。そんな二人が実力行使に出れば、どうなるかなと言わなくても解る。

そのせいでアニタは、二人が口論を始めヒートアップした頃に口を挟まなくてはいけない。止めなければ平原のと真ん中で怪我人が増えるから。

「三日だあ？　どんだけ遠いんだよ」

「愚痴愚痴とうるさいぞ。これでも思っていたより早いんだから文句を言うな」

「誰がうるさいって？」

「お前だよ。フラン・オルブライト」

いい加減にして欲しい。

最初はまだマシだった。口論になるときもお互いが譲れないから罵り合い、最終的に手がでるという形。しかし今は違う。ずっと一緒に居るせいか、二人の沸点は極限まで低くなり、どうでもいい事ですぐに怒り出し喧嘩になる。

正直言つと、放つて置きたい。その方がどんなに気が楽か。

しかし、黙っているわけにもいかずアニタは仕方なく二人に声をかけた。

「フランにルークさん」

いい加減にしてください。いつも通りの言葉は出てこなかった。突如現れた地面に浮かぶ巨大な影。アニタはそれに目を奪われ、上空へと視線を移す。

そこに居たのは巨大な鳥。

灰色に光る翼の先から先の長さは軽く五メートルを超え、黒ずん

だ黄色いクチバシには血が固まって出来たような黒い斑点がいくつも見て取れる。アニタは言葉を失い空を舞う巨鳥に目を奪われた。そんなアニタに気がついたのか、声をかけられた二人も空へと視線を移す。

「でけえ鳥だな。食えんのかあれ」

暢気にそんなことを言うフランに対し、ルークは顔色を変え懷から拳銃を取り出した。

「やつかいなのに見つかった」

警戒態勢をとるルークにフランは大袈裟だと言った様子で問いかける。

「やつかい？ でかいだけの鳥だろ」

しかし、ルークから返ってきたのは怒鳴り声だった。

「違う！ でかいだけの鳥ならどんなに良かったか」

ルークは拳銃を構え、巨鳥の方へと照準を定めに入る。

直後、小さく火薬の爆発する音が連続して三回。ルークの射撃の腕を知っているフランとアニタはルークの銃撃が確実に巨鳥を捕らえたと確信した。だが、巨鳥は音が鳴ったと同時にその場で大きく羽ばたき、強烈な風をおこして弾を止めた。

それを見たルークは顔色を変え、

「くそっ！」

さらに四発の銃声を鳴らす。

けれど、その弾も巨鳥にあたることは無い。大きく旋回して銃撃を避けた巨鳥は、高く飛び上がりこちらの様子を伺っている。

「最悪だ……」

ルークがぼそりと呟くと、その通りだとアニタも思う。

天高くにいる巨鳥に攻撃をする術は無いし、近づいてきたとしても先ほどの巨鳥の動きを見れば人が捕らえられるような動きでないことは明らか。しかも、ルークが攻撃を加えたことにより、巨鳥がどうやってこちらに襲い掛かるうか考えているように見える。あれほど巨大な鳥が襲い掛かってきてはひとたまりも無い。誰もがそう

考えるだろう。

けれど、そうは考えない人間がいた。

「あの鳥は何ていうんだ？」

フランは腰にぶら下げた鉄手甲に手を通し、胸の前で拳を合わせ、そして荷馬車から降り少し距離をとると手近にあった石を拾い、ルークに不敵な笑みを見せる。

「馬鹿かお前！ 狙われるぞ」

ルークはフランからの質問に答えず、戻れと慌てて声をあげる。

しかし、そんなことはお構いなしに、フランは再度同じ質問をした。「もう一回だけ聞くぞ。あの鳥は何ていうんだ？」

全く言うことを聞かないフランに、ルークは仕方なく名を教える。

「ターヴィス。肉食鳥の中じゃ最もでかくて強暴だ」

「ふーん」

そう呟いてフランは持っていた石を軽く自分の真上に投げ、

「じゃあ、今日の晩飯はターヴィスの焼き鳥だな」

落ちてきた石を手甲で思い切り殴りつけた。

金属と金属がぶつかるような高い音がなると同時に、ターヴィスがバランスを崩す。どうやら、フランの打ち上げた石がターヴィスに当たったらしい。バランスを崩したターヴィスは、すぐさま体勢を立て直し真っ直ぐフランへと急降下を始める。それを確認したフランは、かかって来いと言わんばかりに構えを取った。

一直線に向かってくるターヴィス。

迎え撃つフラン。

結果はすぐに出了た。

鈍い音が鳴り、辺りに風が吹く。

一瞬の出来事とはいえ、アニタとルークは目を見開いた。

向かってきたターヴィスは、フランを串刺しにしようと鋭いクチバシを前に突き出し襲いかかってきた。けれど、フランはそれを体捌き一つで綺麗に避ける。だが、ターヴィスの攻撃方法はそれだけではなかった。

クチバシを避けられても全く気にする素振りを見せないターヴィスは、フランを翼で打ち払おうとした。直後、ターヴィスが翼を当てるよりも早くフランがターヴィスの頭を殴り地面に叩き付けた。地面に横たわったターヴィスは口を開け体を痙攣させて動き出そうとはしない。

フランはターヴィスを足で蹴り付け動き出さないことを確認する。「アニタ。今日は肉が食えるぞ！ 肉」

フランは嬉しそうにはしゃぐ。

この八日間、ほとんどすることも無く荷馬車の上に座っているだけ。そのうえ食べる物も、乾燥させ日持ちを良くした野菜や水でふやかさないと食べられないような硬いパンばかり。自由奔放に暮らし仕留めて来た獣の肉を頻繁に村人に振舞っていた事を考えれば、フランがどれだけ我慢をしていたのかは容易に想像できる。

アニタはターヴィスの命を奪うことに少し躊躇いを感じたが、こちらが餌として見られていたこと、そして、重苦しい雰囲気の中、久々に見たフランの笑顔を消してしまわないようにと割り切ることにした。

だが、そんなアニタの思いを一発の銃声が打ち消した。

先ほどはターヴィスが銃弾を防ぎ避けたことで叶わなかったが、止まっている標的にルークが狙撃を外す事などありえない。ルークの放った弾丸はターヴィスの額を打ち抜き、ターヴィスの命を簡単に奪い去ってしまう。

突然の銃声に驚いたフランはルークに怒鳴り声をあげた。しかし、ルークはフランの言葉に反応を見せず、ターヴィスを銃で指し言った。

「言うのが遅くなったが、そいつは食えないぞ」

その言葉を聞き、アニタとフランはターヴィスの方へと視線を向ける。すると、肉が腐ったような異臭と共にターヴィスの体が解け始めていた。

「酷い……」

「何だよこれ……」

口を手で押さえ、フランはターヴィスから一步、また一步と距離をとる。見たこともない現象にアニタとフランが驚いていると、ルークはそれが当たり前のように話し出した。

「そいつを知らなかったようだから無理も無いが、ターヴィスの血は強い酸性でな。どういうわけか、生きてる間は何とも無いが、死ぬと血が体を溶かし始める。とてもじゃないが食えるようなものじゃない。毒性もあるしな」

毒性がある。それを聞いたあとフランの行動は素早かった。ターヴィスから少しずつしか距離をとっていなかった先ほどまでと違い、大きく後ろに飛び一気に距離を測る。そして、懐から出した布で口を覆う。

「良い判断だな」

「黙れクソが」

ルークの皮肉に反論するフランだが、そこにいつものような迫力は無い。ターヴィスの血液が持つ毒性がどれほどのものか解らないが、フランを見る限りではある程度の即効性があり、ルークが口到手や布を当てないところを見ると殺傷性のあるものではないらしい。事実、荷馬車の上にいるアニタも異臭を感じる以外これといった容態の変化を感じることは出来ていない。

ターヴィスの血液から発生する毒は空気を通して体内に入れても命の危険がない。そう確信したアニタは、荷からガラスで出来た棒とナイフを取り出し荷馬車を降りる。そして、帽子をマスク代わりに口に当てターヴィスの元へと歩み寄る。

一瞬にして体を溶かすほどの強酸。普通に考えれば地面が解けていても不思議は無い。そう考えていたアニタだが、近寄ってみればどうということは無かった。確かにターヴィスの体は溶けているが、ガラスの棒やナイフで血液に触れてもそれらが溶けることは無いし地面が溶けているなんてことも無い。そればかりか、良く見れば骨も綺麗なまま残っている。

ターヴィスの体が溶けてしまったのは、ターヴィスが死ぬ際に何らかの物質を体内で生成し、それが血液と反応して体を溶かす作用を生み出すのだらうと仮説を立てたアニタは、ポーチからいくつもの小瓶を取り出しナイフで血を掬ってその中に入れる。そして、それを荷馬車に持ち帰るといくつかの薬品と血を混合させ始めた。

「何をやっているんだ？」

そんなアニタを見たルークが不思議そうに問いかけると、アニタはルークの問いに問いをもつて返事をした。

「毒があると言っていましたよね？」

「確かに言ったが、それとこれにどんな関係があるんだ」

首を傾げて、ルークは解らないといった様子を見せる。しかし、

アニタはそんな事は気にせず話を続けた。

「えつとですね、ルークさんは知らない方法かもしれませんが、これは毒の性質を調べているんです」

「毒の性質……こんなことで調べられるのか？」

「はい。性質が解れば一応解毒剤も作れます。気休めですけど」

小さく笑いながらアニタが言うと、ルークは眉を寄せ難しい顔をする。直後、アニタやフランが想像もしていないような事を語りだした。

「凄いな……解毒剤なんてものは死刑囚を使って作る方法しかない
思っていた」

「死刑囚、ですか？」

アニタが問い返すと、ルークは小さく頷き話を続ける。

「君からすれば馬鹿馬鹿しいことなんだろうが、解毒剤の生成は死刑囚を使って試す。人体に影響のある毒を囚人に飲ませるなりしてその直後に効きそうな薬草や薬を飲ませると言った感じた。それで効果が無ければ囚人は死ぬ事になるし、効果があれば無罪放免となる」

ルークの言葉にアニタは愕然とした。

医療の発展に犠牲は付き物である。それは理解していた。けれど、

医療を発展させるために生きている人間を使うなんて事はあつてはならない事だ。魔女の巣と言われたクラフト村でさえ、そのような事はしていない。

「酷すぎます」

思わず出た言葉。

だが、酷すぎると言うその言葉さえ、ルークの次に発した言葉の前には霞んでしまう。

「そうか？ 罪人が人の役に立っているのだから問題ないだろう」

この言葉を聞いた瞬間、アニタの手はルークの頬を叩いていた。ルークのことを医者だと思っていたから。医者だと思っていたから、この言葉が許せなかった。

どんな状況に置かれた人間でも、助けられるものなら助けるのが医者だと、そう教えられて育ってきた。例えそれが、死刑囚であろうと自分の憎むべき存在であろうと。

それなのにルークは、顔色一つ変えずに言ったのだ。
問題ないと。

アニタは思わず怒鳴りそうになる。けれど、声はあげられなかった。アニタが口を開くよりも先に、ルークが頭を下げたから。

「すまない。君……いや、医者という立場の者と話していることを忘れていた」

「あなたも医者じゃないんですか！」

けれど、やはり怒鳴ってしまった。怒鳴らずにはいられなかった。ルークの持っている医療の知識は、クラフト村の者と比べれば少ないかもしれないが、街に多数存在する医者や一般人が得られる知識のそれを凌駕しているだろう。そして、その技術も並外れたものではない。

ルークの実力は、恐らく魔女として悪魔憑きとして呼ばれないぎりぎりの水準。これまでの道のりでルークの話聞いていたアニタはそう考えている。つまり、ルークは魔女や悪魔憑きと呼ばれる者を除けば、大陸でも屈指の名医と言って過言はないはずなのだ。

だが、ルークから返ってきた言葉は的外れなものだった。

「……誤解があつたようだから言っておくが、私は医者ではない。料理が出来るからと言って料理人にはならないだろ？ それと同じだ。それに、私がこれくらい出来ないようでは、私の夢を実現させる事は出来ないんだよ」

ごくりと音を立て、ルークはボトルに入った水を飲む。

ルークの夢というのがアニタには解らない。けれど、医者でないとはいえ、それだけの技術を持つていながら医者の気持ちが解らないわけが無い。

アニタはそんなことを考え何を言っているか解らなくなると、その場に気まずい空気が流れる。だが、それさえも気にしていないようにルークはアニタの手元を指差し言葉を続けた。

「ともあれその小瓶……捨てておいたほうがいいぞ」

その言葉を聞いて、アニタは首を横に倒す。わざわざ採取した血を捨てなければいけない理由が解らなかったから。けれど、その答えはすぐにルークから伝えられた。

「ターヴィスは数が少ないせいか、仲間意識が強い。仲間が殺されたと解れば、殺した人間を殺しにくる。だから……」

視線をアニタからフランへ移すと、ルークは面倒くさそうに告げた。

「お前も街に着き次第、身体を洗え」

つまり、小瓶の中にある血やフランの身体に付いたであろうターヴィスの死臭。それがターヴィスと呼び寄せることに繋がるのだらう。忠告を素直に聞き入れたアニタは、ルークに軽く礼をすると、バッグの中から香りの強い香草を取り出しそれで小瓶を包み込む。そして、それをルークに見せると、ルークは好きにすればいいと小さく笑みを浮かべる。それでも危険なら、ルークはこんな反応をしないだらう。そう解釈したアニタは、香草に包んだ小瓶をバッグに入れ、新たに別の薬草を取り出した。

「こっちまで歩いてこれる？」

口に布を当てたまま動かないフランにアニタが声をかけると、フランは小さく頷いて荷馬車の方へと歩み寄ってくる。その足取りは思ったよりもしつかりとしていて、時間が経てば毒による体調不良も直ってしまいそう。

荷馬車に戻ってきたフランにアニタが声をかけようとすると、フランは手を出してアニタの言動を遮った。そして、口に当てていた布を取り大きく深呼吸をすると大声でルークを怒鳴りつけた。

「何やったか解ってんのか、てめえ!!」

予想すらしていないフランの怒りに、アニタは思わず身を強張らせる。自分が怒鳴られているのでは無いと解っている。しかし、それでも本気で怒ったフランを見ることなど稀だから。

「てめえが撃ち殺さなきゃ、俺は毒に当てられる事も無かったんだぞ」

もつともな理由で怒りを吐き出すフランに対し、ルークは冷めた目で静かに言い返す。

「その通りだ。しかし、あそこで撃ち殺す必要があったからそうした」

「俺への嫌がらせ以外にどんな理由があんだよ!？」

ルークの言葉を聞いた直後、フランはルークの胸倉を掴みさらに声を荒らげる。

フランの言うとおり、あそこでルークがターヴィスを殺さなければフランが毒に当てられる事は無かった。仮に、食べられない事を伝える方法だったとしてもあまりに度が過ぎている。だからアニタは、ルークがターヴィスについて語っていない事があるのだと思い、フランを止めに入る。しかし、その声はフランには届かなかった。フランはこれまでのルークに対する不満という不満を全てぶつけるように、罵詈雑言を並べルークをまくし立てている。

アニタはフランの腕にしがみつき、

「お願いだから、止めてよ」

瞳には涙が浮かばせ、必死の思いで声を絞り出した。するとフラ

ンは、ルークを掴んでいた手を離し複雑そうな顔でアニタを見る。

「なんで止めるんだよ？ こいつのしたこと解ってるだろ」

「解ってるよ。解ってるけど、ルークさんの話も聞いてあげよ？」

「話ってお前……何を聞く必要があるんだよ」

視線をアニタからルークへ移したフランは、怒りを隠そうともせず不機嫌そうに奥歯を噛み締める。よく見ればアニタがしがみついている方と反対の腕は力強く握られ、今にもルークを殴りだしてしまいそう。

「ルークさん言いましたよね？ 撃ち殺す必要があつたって。その理由は何なんですか？」

フランとルークの気持ちを逆撫でしないよう、気を払いながらアニタは問いかけた。ルークの言葉から察するに、必ず理由があると思つたから。

「……お前が殴り倒した後、アレが口を開けていたのを覚えているか？」

ターヴィスの屍骸を指しルークはフランに尋ねる。するとフランは、覚えていないと頭を掻く。けれどアニタは覚えていた。確かにターヴィスはフランに殴り倒された後、口を開けて痙攣を起こしていた事を。

「あれはな、あいつが仲間を呼ぼうとしてたんだ。いや、呼び始めていたと言うべきか？ ターヴィスは嗅覚よりも聴覚の方が優れているからな」

「呼び始めてただあ？ 何の声も出してなかったぞ。言い訳するならもうちよつとマシな嘘をつきやがれ」

ルークの説明にフランは声を張り上げる。だが、アニタはすぐにルークの言いたい事に気が付いた。コウモリなどが超音波を使うように、ターヴィスが鳴き声以外の人には解らない意志伝達手段を持っていたとしてもなんら不思議は無い。アニタは、今にもルークに飛び掛りそうなフランを静止し、口を開いた。

「……人には聞こえない声で鳴いていたんですね？」

「そう言うことだ」

小さく笑みを浮かべながらルークが頷くと、アニタもそれなら納得できるとフランの方に目を向ける。けれどフランは納得出来ないようで、尚もルークに噛み付いた。

「人に聞こえねえんなら、なんでそんなことが解るんだ？ 誰にも聞こえないのに解るわけないだろ」

言われてみればもつともな質問。コウモリのような小さな生き物なら捕獲して調べる事も出来るだろうが、ターヴィスのような大型の生き物だとそうもいかない。しかもターヴィスは肉食の獣。わざわざ危険を冒してまでそんなことを調べる必要は無い。

しかしルークは、フランの疑問に対しこれ以上ないぐらいの答えを用意していた。

「人がターヴィスを討ち取ったという記録は、私の知っている限り八十四件。そのうち二十二件がすぐにターヴォスを殺さず観察していたところ、どこからか現れたターヴィスの群れに襲われている。これを偶然で済ませるのならそれで構わない。だが、済ませないとしたらどうだ？ 多少身体に害がある程度の毒に晒されるか、ターヴィスの群れを相手にするか……答えなど聞くまでもない」

ターヴィスの群れとういのがどれほどの規模なのか解らないが、それでも二体や三体だけということはないだろう。つまり、これが事実ならばルークの行った行動は間違っていないという事になる。

しかし、いかにルークの行った行動が最善のものだったとしても、何も言わず銃を撃つというのはいかなものか？

一言言っておけば、フランがここまで怒ることもなかっただろうから。

アニタはにらみ合いをするフランとルークを見て小さく溜息をついた。

「フラン、ルークさんに謝って」

「はあ？ 何で俺が謝るんだよ！？ 謝るとしたらこいつのほうだろうが」

「いいから謝って」

声を荒らげてくるフランに、アニタは平坦な口調でそう告げる。

「くくく。彼女の方が貴様よりも利口だな。場の納め方というのを知っている」

「何を言ってるんですか？ フランの後は、ルークさんがフランに謝ってくださいね」

「なぜ私が謝る必要がある？ あれが最善の行動だったんだぞ！？ 時間が経つことに危険度は増していくんだからな」

「だとしても、喧嘩は両成敗です」

アニタがそう言つと、フランは強く拳を握り、ルークは奥歯を噛み締め顔をしかめた。

「悪かった。けどな、次からはちゃんと先に言いやがれ」

「時と場合による。一刻を争う時に確認などってはいられん。だが、こちらも悪かった」

共に納得しているような顔ではないが、アニタにこんなことを言われていがみ合っているわけにはいかないのだろう。フランはともかくとしても、ルークが自分よりも年下のものに氣を使われるのが嫌いだろつという事は、今までのやりとりからも明らかだから。

気まずい雰囲気は解消されたものの、特にこれと言った会話も無いまま時間は過ぎていき三人は目的の街にたどり着いた。

第二章 02

王都レノン——街を取り囲むように人工の川が流れ、密入国を防ぐための高い壁が川に沿って延々と続いている。かつて王が住んでいたと言われる都市は、外観からしてアニタが見た事のある都市とは全くの別物だった。

「すごい」

思わず感嘆の声を漏らすアニタ。

しかし、これだけでは終わらない。

一步街の中に入ってしまったえば、そこは別世界。

街の至るところに張り巡らされた水路に、規則正しく並ぶ家。商店街には活気あふれる商人の声が木霊し、街路には人が溢れかえっている。まるで世界中の人がこの街にいるのではないかと錯覚してしまうほど。

他にも見た事が無いほど大きな建物がいくつも存在し、遠くに見える教会の屋根には大きな鐘が備え付けられている。

想像を遥かに超えた景観にアニタは言葉を失い、フランは笑いながら声をあげる。

「すっげえなおい！」

ルークの肩を叩きながら歓喜するフラン。だが、あまりに馴れ馴れしいフランに気分を悪くしたのか、ルークはフランを睨み付ける。
「……お前は、私に対してあまり良い感情を抱いていないのでは無かったか？」

「なんだよ。細かい事にすんなって」

ここに来るまでの出来事を忘れたとは言わせない。そう言わんばかりの表情をルークが浮かべると、フランはばつが悪そうに頭を掻き謝罪の言葉を口にする。

「悪かった。けどよ、俺だって驚いたんだぜ？ 公爵の息子なんていうから、てつきりお坊ちゃんかと思えば全然違うしよ」

これはアニタも思っていること。礼儀正しいところなどは育ちのよさが伺えるが、言葉遣いや態度はどれをとっても公爵の息子と思えるようなものではない。フランの言葉に納得し、アニタも小さく頷く。

そんな二人の声に、ルークは皮肉交じりに言う。

「……家のことを放って各地を転々とするような人間が、お坊ちゃんだと思うか？」

「思わねえよ。だからムカついたんだ」

「ムカついた？」

「ああ。貴族のお坊ちゃんなんて、ほとんどが親の七光りでいきがってる奴らばかり。それなのに、お前は違う。何でも知ってるし、何でも出きる。羨ましくてムカつくのも無理ないと思うぜ」

ムカつくという部分は置いておくとして、アニタもルークを羨ましいと言うには同意する。ルークのように、幅広い知識と技術を持っているものなど稀であるし、それが高貴な人間ならさらに希少となる。しかし、そのほとんどが自分の能力を過大評価し自分よりも劣るものを見下す傾向にある。そのことを考えれば、ルークのような人間を羨ましいと思うものは少なくないはずだ。

それなのに、ルークは自慢する様子も無く言っただけ。

「何でもは知らん。知ってる事だけだ」

「何でも出きるは否定しねえんだな」

フランの問いにルークは不適な笑みを浮かべ、

「ああ。人並み以上には何でもできる」

「やっぱムカつくなお前」

「お前ほどではないさ」

悪態をつくフランに、かかってこいと言わんばかりのルーク。全く、何度やれば気が済むのか……せつかく気分を変える事が出来たのだから止めて欲しい。そう思いながら今にも喧嘩になりそうな二人にアニタは割ってはいる。

「止めてよ二人とも」

今までのように声をあげたわけではない。けれど、それが効果的だったのか二人は素直に謝罪する。予想していなかった反応に少し戸惑いつつも、何も起こらなかったことにアニタはほっと息を吐く。「解ってくればいいんです」

アニタがにこりと笑うと、フランとルークは互いにそっぽを向く。しかし、レノンに来る道中のような気まずさは感じられない。これを期と見たアニタは場の空気が悪くなる前に続けて口を開く。

再びフランとルークが言い合いを始めれば無駄に時間を使うだけではなく、この場所で騒ぎ出せば人々の注目を浴びることは回避出来そうにないから。

「ところでルークさん。これからどこへ行くんです？」

当初の目的を考えれば、アニタに医師としての資格を与えるためそれ相応の場所に行くのだろう。しかしルークはすぐに返事をせず、何かを考えたあと寄りたい場所があるから付いてきて欲しいと二人に頭を下げる。

寄りたい場所というのがアニタは気になったが、それでも自分を連れてルークが教会に行くとは思えなかったため、こくりと頷いたけれどフランはそれが面倒なのかぶつぶつと文句を垂れる。

「なんで俺たちがお前の用事につきあう必要があんだよ。勝手に行けばいいだろ」

また言い争いになるかもしれない。一瞬アニタはそんなことを考える。だが、反論は想定範囲内だと言わんばかりにルークはフランに脅しをかけた。

「ふむ。それはそれで構わんが、この街での宿代は誰が払うんだ？ お前が思っているよりも遙かに高いぞ」

この言葉はフランにかなりのダメージを負わせる。三人で村を出るとき、ルークが道中やレノンに付いてからの宿代や雑費は全て支払うと言っていたから。とはいえ、アニタとフランもいくらかは持つてきている。だが、宿など借りれば数日も持たないうちに底をつく程度の金額しか持っていない。

拒否権の無い選択を迫られたフランは、仕方なくルークに付き合うことを承諾した。

「ぐっ、解ったよ。行けば良いんだろ行けば」

「本当に凄いですね。通りごとに景色が違うというか……」

ルークの後に付きしばらく歩いたところで、アニタはきよきよと辺りを見渡し、レノンの街路を歩いた感想を述べる。

「ああ。レノンは商業区と工業区、住宅区が完全に分かれているかな。初めてくるものはたいてい驚く。ここまで完璧に区分けされた街は他に類を見ない」

言われてみれば確かにそうだった。今歩いているのはレノンのメインストリートに当たる部分なのだが、その道を境に右と左で見える街並みが全く違う。

右に見えるのは居住区なのだろう。小綺麗な家が立ち並び道端で話し込んでいる人こそ見受けられるが、それほどたくさんの方が居るわけではない。しかし、左側に視線を移すとその認識を変えなくてはいけなくなる。

多くの店が立ち並び、多くの人で賑わいを見せる。その数の多さときたら街に入った直後のそれを大きく上回る。

「そうなんですか？ 大きな街に行ったことが無いので、これが普通なのかと思いました」

「そんな事はない。この街が特殊なだけだ」

「特殊っか、綺麗に纏まり過ぎだろ。俺はユーステルムみたいにごちゃごちゃした感じの方が好きだな」

フランの言葉にアニタとルークは互いに思ったことを口に出した。

「ボルド以外の街に行った事あるんだ？」

「お前、村から出たことがあったのか？」

アニタはフランが度々村を出て隣町のボルドに出かけていること

は知っていた。けれど、ユーステルムなどという街は村の近辺には存在していない。いつそんな街に行ったのだとアニタが不思議そうにフランを見ていると、フランは溜息をついて言い返す。

「お前ら馬鹿にしすぎだ。俺は元々そっちの生まれなんだよ。いろいろあつて引越してきたんだ」

「そうなんだ」

基本的に静かな村人たちの中で無駄に活発なフランを思い出しアニタは納得する。そういわれれば、フランもフランの父親も他の村人と比べればどことなく雰囲気が違う。そんなことを考えアニタが小さく頷くと、それに続いたルークが納得したように大きく頷いた。「言われてみて納得だな。ユーステルムは血の気の多い奴が多すぎる」

「なんだ？ あんな所に行ったことあんのかよ」

「何度か行っている。あの街のうさぎ料理は格別だからな」

「確かに美味いなあは。死ぬまでにもう一回食つてみたいもんだ」
笑いながら言うフラン。しかし、ルークはもの問いたげな顔をして言葉を返す。

「行けばいいだろ？ お前なら食料さえなくなればたどり着ける」

アニタはユーステルムという街がどこにあるかは知らない。けれど、ルークの言うとおり食料さえなくなればフランはどこにだつていけると思つている。だから、フランが何と言い返すのか興味が湧いたのだが、フランがルークに返した言葉は思つていた以上に普通なものだった。

「お前と一緒にすんな。親父放つていけるかよ」

「……体が悪いのだったか」

「そういうこと。で、お前の寄りたい場所つてどこなんだ？ 個人的には美味しい飯が食いたいんだが」

歩いていることに疲れたのか、それとも話題を切り替えたかっただけか。フランは自分勝手な事を言い出した。だが、ルークはそれ

を軽く受け流す。

「なんなら一人で食いに行ってくるか？ 商業区の奥までいけば、結構な数の店があるぞ」

「はあ？ なんて一人なんだよ。行くならアニタも一緒に連れて行く」

「そうしてもらって構わないと言いたい所だが、生憎そうもいかなくてな」

「なんでだよ？」

「彼女にかかりっぱなしというのも悪いからな、今後の治療方針を通いつけの医者に教えてもらう必要がある」

つまり、ルークの立ち寄りたい場所というのは診療所と言うこと。それならば、確かにフランは席を外していても問題はない。アニタさえいればいいのだから。

しかし、フランの中にはアニタとルークを二人つきりにするとう選択肢は無かったらしい。

「それって時間かかるんじゃないかねえのか？」

「どうだろうな。それほど時間はかからんと思うが……」

ルークはアニタの方へ目を向ける。それに気がついたアニタは、頭の中で教えないといけないことの要点をまとめ、ルークの容態と治療方法や方針を説明するのにどれぐらいの時間がかかるか考えた。

ルークの怪我がどれほど酷かったとはいえ、それは二ヶ月近くも前のこと。ルークが杖も使わず歩いている所を見れば、思っていたよりも傷の治りが早かったらしい。そのおかげで、引継ぎをするにあたっての説明は思ったよりも少なくて済む。手間取ったとしてもかかる時間など知れている。

「一時間もかからないと思います。ルークさんの足はほとんど治ってますから」

「だそうだ。待てるか？」

「一時間……長いな」

フランは明らかに嫌そうな顔をする。実際に腹が減っているのかも知れないが、じつと話を聞いているのが面倒と言うのが本音だろう。フランの態度からそれを感じ取ったアニタは、なるべく早く終わらせるからとフランを説得する。

そんな二人を見ていたルークは諦めたように口を開いた。

「ある程度話がついたら、二人には一度席を外させる。その時に飯でも街めぐりでもやってくれ」

その後、診療所までの道のりを歩いているときふとアニタは疑問に思う。

先ほどは気にしなかったが、なぜルークは普通に歩いているのか？ 確かに傷はほとんど治っている。けれど、杖もなしに歩ける状態まで回復しているとは到底思えない。

それなのに、レノンについてからのルークは普通に歩いていた。アニタがふとした疑問を感じなければ気付かないほど、あまりにも自然に。

「ルークさん」

「なんだ？」

「足……大丈夫なんですか？」

「大丈夫ではないが、普通に歩くぐらいは問題ない。それに」
「それに？」

「これ以上、筋肉がつくとは思えないからな。多少無理をしてでもリハビリは必要だ」

リハビリ。つまり、アニタから見れば歩けるような状態ではないにしても、ルークからすれば普通に歩ける程度まで回復していたと言う風に考えるのがいいのだろうか。そうでなければ、ルークが歩ける事自体がおかしなことなのだから。

ルークの技量を考えれば、どこまでが無理のあることなのか解っていると思う。それでもアニタは注意を促すよう告げる。

「それはそうですけど、あんまり無理をすると傷が開きますよ」

「心配のしすぎだ。さっき自分で言ってただろう。私の足はほとん

ど治っていると」

心配するアニタにルークは笑って答える。

それからしばらく歩いていると、不意にルークが足を止めた。

「ついたぞ」

ルークが立ち止まった場所は、街でも珍しい白いレンガ造りの家。外壁の代わりに木々が家を取り囲み、庭を綺麗に整えられた花々が彩っている。診療所と言うよりは、位の高いものが住む家と言ったほうが似つかわしい。

「これ……診療所なんですか？」

「そうだ。とは言っても、自宅兼診療所だからな。庭なんかは趣味で作ってるそうだ」

まったく良い趣味をしている。そう付け加えたルークは、診療所の戸口に手をかけ中に入っていく、アニタとフランもそれに続いた。診療所に入ると、入り口付近で白衣を着た美しい女性がこちらに向かって頭を下げていた。

「いらつしゃい」

だが、その女性はそこまで言ったところで咳払いをし言い直す。

「お久しぶりでございます。ルクレーシヤス様」

言い直したあと女性が再度頭を下げると、挨拶を返すようにルークも軽く手を挙げる。

「久しぶりだなトリシヤ。元気でやっていたか？」

「ご覧の通り元気でやっています」

にこりと笑ってトリシヤが会釈すると、ルークは診療所を見渡した誰かを捜しているような素振りを見せる。そして、探している人物が居なかったのかトリシヤに尋ねた。

「ローランドの奴はいないのか？ 少し話があるんだが」

「申し訳ございません。ただいま手術の最中でして……」

トリシヤは診療所の奥にちらりと目をやってみせた。どんな手術をしているのか解らないが時間がかかるのは無理もないこと。アニタやルークでなくとも、医術を身につけているものなら誰でも想像

が付く。

「どれぐらいで終わる？ 時間がかかるようなら出直すが」

「いえ、それには及びません。難しい手術ではないとのことですので、時期に終わると思います」

「そうか。なら待たせてもらうとしよう」

「解りました。では、こちらへどうぞ」

第二章 03

診療所の奥にある応接室で待たされること十数分——白衣を着た中年の男が頭を下げ応接室に入ってきた。

「遅くなつて申し訳ありません。お久しぶりでございます。ルクレーシャス様」

「久しぶりだな、ローランド」

ルークはローランドと呼んだ男と手を握り合い挨拶を交わす。そして、ルークがアニタとフランの紹介をすると、ローランドはアニタとフランの方へ視線を移し頭を下げながら名を名乗った。

「初めまして。リヴィングストン家の顧問医師をしている、ローランド・マイヤーズと申します」

礼儀正しい挨拶。つられてアニタも一礼し名を名乗る。

「は、初めまして。アニタ・レインフィールドです」

深く被った帽子がそのままだった事で気分を害したのか、それとも後のフランが腕組みをしたまま名乗った事がいけなかったのか。

どちらかは解らないが、ローランドは一瞬眉を寄せ、その後すぐに笑顔を作つて見せる。

「ところでルクレーシャス様。今日はどういったご用件で？」

ローランドの問いかけに、ルークはベッドに座るとおもむろにズボンの裾を捲りあげた

「しばらくはローランドに診てもらふ事になるだろうからな」。

そこにあつたのは傷まみれの足ではなく、健康な足でもない。鉄の板を貼り合わせたようなものが足全体を覆っている。

そんなルークの足を見たローランドの表情は芳しくない。

「これは……義足……ですか？」

「いや、義足とは違う」

そう言つてルークは足に貼り付けられていた鉄の板を器用に剥がしていく。良く見れば、ただの鉄の板ではなくジョイント部分に歯

車や動力になりそうなものがいくつも埋め込まれている。

「オフィリアの考案した物なんだが、何と言ったか……ともあれ、この足では満足に歩けないからな。治るまで着ける事にしたんだ」

「はぁ……にしても、魔女の作ったものを着ける事もないかと思いませんが」

「魔女？」

場の雰囲気は一変する。

ローランドを睨み付けるルークに、やってしまったと言わんばかりのローランド。村や道中での会話で、ルークが魔女と呼ばれるものに対し特別な感情を抱いているのはわかっていた。だが、ここまで過敏に反応するとアニタは思っていなかった。

「申し訳ありません」

深々と頭を下げ、侘びをいれるローランドにルークは溜息を吐いた。

「今回だけは許す。だが、次はどうなるか解っているな？」

「解っております。しかし、オフィリア様の造るものは何と言いますか……いつも驚かされますね」

態度を一変させたローランドは、感心したようにルークの足を眺める。けれど、これに驚いたのはローランドだけではない。

ルークの足の状態は治療したアニタが一番良くわかっている。だからこそ、ルークがなぜ歩けているのか不思議で仕方なかった。けれど、その謎は今になって解けた。解けたのだが、それでも納得できない部分がある。

オフィリアが造ったとされる保護具のような物は、ルークの足のサイズにぴたりとあっており、怪我をしてから造ったとは到底思えない。だが、ルークの荷物の中にこんなものは存在していなかった。

つまり、ルークは意識を取り戻したあとにこれを造ったと言う事になる。ということは、ルークの頭の中には数少ない材料からこれほど高度な技術が詰め込まれたものを作り出せる設計図と技術が詰

め込まれているということ。

この事実にあニタは衝撃を受けた。

「この状態で歩けるようになるとは……にしても……」

まじまじとルークの足を見詰めるローランドは言葉を濁す。

「この治療方法は一体……見たことも聞いた事ありませんが、ア
ニタ殿が施術されたのですか？」

突然かけられ、びっくりしたアニタは体を飛び上がらせる。

「い、いえ、あの、そうですけど……」
「なるほど……」

そう言ったあと、ローランドは何かを小さく呟き、思いついたよ
うに言葉を続ける。

「ルクレシヤス様と込み入ったお話があります。申し訳ありませ
んが、外で時間を潰してきてはくれないでしょうか？」

いくら人が多いとはいえフランと一緒にいれば心配は無いだろう。
それに、一人ではないとはいえ親しくもない人物と狭い空間にいる
ぐらいなら、街で商店でも眺めている方がいい。そう考えたアニタ
は、ローランドの言葉に小さく頷いた。

そして、フランの腕を引っ張り小さく呼びかけると、退屈してい
たのか嬉しそうな顔でフランは首を縦に振った。

アニタとフランが診療所を出て行こうとすると、ルークが二人を
呼び止める。

「これでも持つて行け」

投げ渡されたのは数枚の銀貨が入られた小さな袋。

「お前たちには道中迷惑をかけたからな。それで気晴らしでもして
くれ」

どうやら、ルークも道中での出来事はいい思い出ではないらしい。
つまりこれはルークなりの気遣いなのだろう。だとしたら変に気を
使うのも悪い気がする。

アニタはルークに頭を下げ礼を言うと、フランと共に診療所を出
て行った。

診療所を出るとすぐ、フランが隣で大きな伸びをする。それにっ
られ、アニタも小さく伸びをした。

「とりあえず、飯だな！ 飯！ 絶対うまいもんがあるはずだ」

そう言ってフランは勝手に歩き出す。目指している場所はルーク
の言っていた飲食店ばかりが軒を連ねる通りなのだろうが、場所は
解っているのだろうか？ 疑問に思いながらもアニタはフランの後
についていく。すると、数分もしないうちにどこからか良い香りが
漂ってきた。

アニタよりも先に通りを見つけたフランは、通りの入り口まで走
っていく。そして入り口付近に着くと大声でアニタを呼び始めた。

「何やってんだよアニタ！ 早く来いって」

恥ずかしい。

思わずアニタは帽子の両端を握り、街行く人と視線が合わないよ
うにする。けれど、フランは声をあげるのを一向に止めようとしな
い。アニタは早足でフランの下へたどり着くと、フランの隣に言っ
て小さく呟いた。

「馬鹿……恥ずかしいから止めてよ」

しかし、フランは悪びれた様子も無く通りを指差した。

「気にしすぎなんだよお前は。それより見てみるって！ マジで美
味そうなもんがいっぱいあるぞ」

フランが指差した先には、聞いていた通り数多くの店が並び立っ
ていた。

少しでも多くの客を取れるよう、店先に自慢の商品を並べる店。
パフォーマンスで客を集める店。開いているのかそうでないのか区
別のつかないような静かな店。

昼時だからかもしれないが、店ごとの客取り合戦は白熱したもの
となっている。

そんな通りをアニタとフランが興味津々といった様子で歩いてい
ると、やはりと言っべきか、店の前に出ている客引きから色々な声
が投げかけられてきた。

「その若いご兩人！　うちの海鮮料理はどうだい？　早くて安くて美味しいよ」

「恥ずかしがり屋なお嬢さん。うちのケーキを食べていけないか？　甘くて美味しいよ」

「その男前なお兄さん！　今夜の精力付けに蛇料理はどうだ！？　彼女も休む暇がなくなるぜ」

海鮮料理には興味がある。村の周りには川が流れているぐらいだし、そこで獲れるものはいつも決まって同じ魚ばかり。店の前に並べられている貝や海老などはものすごく美味しそうである。

しかし、それ以上にケーキを食べてみたい。クリームで綺麗にデコレーションされ、中には果実がふんだんに散りばめられている。不味いわけが無い。絶対に美味しいに決まっている。けれど、お昼ご飯には合いそうも無い。だから今は何も言わないでおく。診療所に戻る時、ルークの分も買って帰ればいいのだから。

最後に蛇料理。この主人は何を勘違いしているのだろうか？　どうやったらフランと恋仲に見えるのだ。しかも精力付け……よからぬ事を想像したアニタの顔は、一瞬で真っ赤に染まる。

しかし、そんなアニタをよそにフランは海鮮料理にもケーキにも興味を示してはいない。最後の勧誘の声にはまんざらでもないようだが。

それからしばらく通りをぶらぶら歩いていると、一つの店の前でフランが足を止めた。

「ここでもいいか」

看板には『薬膳料理の園』と書いてある。見たまま薬膳料理の店なのだろう。

「珍しいね。フランが進んでこういう所を選ぶのって」

つつい口に出してしまう。日ごろの生活を考えればフランがこんな店を選ぶ事はない。だが、こんな店を選ぶと言うことはフランも一応体のことに気を使っているのだろう。

「まあそうなんだけど。あれだ、あれ！　最近クソ不味いものしか

食べてなかっただろ？ 栄養価が高いつてわけでもねえしさ。だからなんだ、久々に食うまともなもんなら、こんなもんでも美味く感じるだろって思ってたさ」

「はは。フランも少しは私の言う事聞いてくれてるんだね。けど……」

好き勝手に店を決められたのだ。これぐらいの悪ふざけはいいだろう。そう考えたアニタは口元に笑みを浮かべフランに言う。

「薬膳料理って、酷いのが多いよ？」

するとフランは苦笑いを浮かべ、

「……やっぱりここ止めて肉にするか？」

予想通りの反応を見せてきた。だからアニタは、下からフランを覗き込むように見て笑顔をみせる。

「だーめ」

結果だけを言うと、予想外に薬膳料理は美味しかった。中でもとりわけ美味しかったのは、肉なんか無いだろうと愚痴をこぼしていたフランに店の店主が勧めてきたもの。

最初は本当に美味しいのか？ と半信半疑だったフランだが、一口食べてしまうとあまりの美味しさに一人でそれを食べきってしまった。しかも、一つでは足りなかったらしく食べ終わった直後に同じものを頼むと言う異様ぶり。

それほどに美味しいのかと、フランが頼んだ羊肉の香草と薬草練りをアニタも一口食べさせてもらったのだが、これが薬膳料理かというほど美味しかった。

しかし、薬膳料理は体の栄養を考えて食べるものなので、それだけ食べていては栄養が偏る。そう考えたアニタは他にも数種類の料理を頼みフランにも食べさせた。

とはいえ、そのいずれもをフランが美味しいといって食べていたの

だから、この店は当たりだったのだろう。アニタが調理したものはこうはいかない。

料理を食べ終えた二人は、次に行く店を考えていた。

「アニタは見たいものとかあるのか？ あるんだったら付き合っぜ」

「私は……鞆が見たいかな。このポーチちよつと小さいから」

アニタは村にいたとき、治療するのに足りないものがあればそれを自宅まで取りに行っていた。面倒といえば面倒だが、とりわけ時間がかかるわけでもないし、不測の事態など滅多におこらないのでそれでも構わないと思っていた。

けれど、村を出て気付く事になった。現在好んで持ち歩いているポーチに詰められる道具や薬草は多くないのだということに。

だから、もっと収容力のある大きな鞆が欲しいのだ。

「もう少し大きなポーチが欲しいんだよね」

鞆を見ながらそう言うのと、フランは苦笑いをしてこちらを見る。

「いや、それ以上でかいのは……いらないんじゃないか？」

「そうかな？ 今入れておけるのって、必要最低限の物だけなんだよ？ けど、もう少し大きいポーチがあれば色々便利だし」

「そういう意味じゃなくてだな」

フランは困ったように頭を掻いたあと、何かを思いついたのか腰に下げていた布製の袋をアニタに突き出した。

「なあアニタ。お前ならこの袋に、あとどれぐらい物を詰められる？」

開けられた袋の口をアニタは覗き込む。小さな袋の中には包帯や傷薬、銅貨などのフランには最低限必要なものから、木の棒や石など入れる必要がわからないものまで一緒に入れている。だが、まだまだスペースは有り余っている。

「どれぐらいって……同じものなら全部五つに増えても入れられると思うけど、さすがに六つになると無理かな」

アニタは思った事を口にした。けれど、フランは呆れたとも感心したともとれる息を吐いて断言する。

「はつきり言うぞ。それは異常だ。どんなに詰め込んだとしても、せいぜい今の三倍が限界。五倍なんてどう考えてもありえない」

異常と言われる事を想定していなかったアニタは困惑する。たしかに自分の見立てでは、今の五倍の量を入れることが出来ると思っただ。けれど、フランが言うには三倍が限界。人によって見解の違いがあることは解っているが、ここまで大きな開きがあるとは考えもしなかった。

「本当にそう思う？」

「ああ。それにな、お前は必要最低限の物しか入れてないと言っただが、ルークの持ってた医療系の道具を思い出してみろ。お前がいつも持ち歩いてる量の半分もなかったぞ」

言われて思い出す。

治療を終えルークが眠っている間、フランはルークの荷物が無いかを探しに出かけていた。そして見つけてきたものは医療道具を含め様々なもの。しかし、そこにあつた医療道具は旅をしていたというには余りにも物足りなかった。

だがルークは、これだけあれば大体の事は出来る。確かにそう言っていた。つまり、旅をしている最中にかかる病や怪我を治療するに当たって、あれだけの量があれば一般的な医者からすれば十分だと言ふ事になる。

「それは、そうだけど」

「だろ。お前は今のままでも十分な量を持ち歩いてるんだよ。それとも何か？ 偶然会った重症患者にすら最適な治療を施すのが、お前の必要最低限なのか」

「出来るならそうしたいよ……けど」

現実的にそれは無理。そんなことアニタだって解っている。けれど、その場できちんとした治療ができるならそれ以上のことは無い。「それが無理だから、最低限の事はしたいって思うんじゃない」

だから、一人でも多くの人を助けるために技術と道具が必要なのだ。

アニタの言葉にフランは小さく頷く。アニタの言葉ではなく、アニタを否定するために。

「解った。解りやすく言ってやる。お前の考える必要最低限の治療ってのは、そこらにいる医者ができる最高の治療なんだよ」

「そんなことない。私がやってるぐらいの事なら誰だって」

「出来ねえよ」

そんなはずはない。他の医師をクラフト村にいた人たちとルークしかアニタは知らないが、その程度なわけがない。その程度が一般的な医師に出来る最高の治療のだとしたら、アニタが助かると思っている患者の十数パーセントしか助ける事などできないのだから。けれど、フランは言う。

アニタがしている治療は最低限の治療でないと、はっきりとした理由を提示して。

「お前は知らないだろうけど、お前が来る一年ぐらい前までは村にも医者がいたんだ。けど、そいつはお前が簡単にやってのける簡易的な治療ですら四苦八苦してやがった。あれが一般的かどうかは知らねえけど、あれを一般的だっていうんなら、お前がする最低限の治療は一般的に見て間違いなく最高の治療だ」

もしもフランの言う事が真実なのだとしたら、アニタは資格を持つ医師の見解を大幅に変えなければいけない。その程度の技術や知識で医師としての資格を得られるのならば、ルークは医者などではなく、悪魔憑きと呼ばれる部類の技術を持っている事になるのだから。

「……だったら聞いてみようよ」

「聞いてみるって、何を？」

「本当に……本当に、そんなので医師の資格が取れるかどうか」

「おもしれえ。後悔すんなよ？」

「しないよ」

愕然とするかもしれないけど。その言葉は出さずに飲み込んだ。それからしばらくして、街を一通り回り終えたアニタとフランは、

日が暮れないうちにとルークの待つ診療所へと戻った。

第二章 04

「逃げろお前ら！」

診療所の置くから突然降りかかる怒鳴り声。その声と同時に、出入り口を武装した兵が塞ぐ。アニタとフランは思わず診療所の奥へと駆け込んだ。しかし、そこに待っていたのは想像もしない光景だった。地面に倒れこんだルークの首元には剣が当てられ、その周りにも数名の兵士が武器を構えている。

「どうして……」

体を震わせ動揺するアニタの肩を抱き、フランがアニタを引き寄せる。

「最悪だな。まさかルークが売られるとは思わなかった」

フランの言葉を聞いて、アニタは今の状況を理解する。

ルークに言われ診療所を出て行く前のやり取り。それを見て、ローランドが魔女を毛嫌いしている事は解っていた。二人の間にどんなやり取りがあったのか解らないが、ローランドはアニタのことを魔女として通報したのだ。

「観念しろ！ お前たちに逃げ場は無いぞ」

じりじりと詰め寄ってくる兵を見て、アニタは怯えるしかなかった。いくらフランが強いとはいえ、逃げ場のない場所でこの数の兵を相手にするのは無理がある。だが、フランはアニタにしか聞き取れないような小声で言う。

「この数相手に無傷はきついから、後で手当してくれよ」

どうやら、フランはこの場に兵を倒すつもりでいるらしい。アニタの肩から手を離れたフランは手甲に腕を通し、いつ兵が向かってきてもいいよう構えを取る。

このままでは間違いなくフランは兵と揉め事を起こす。そうなれば、悪くなるのは自分だけではない。フランまでも魔女擁護の罪で捕まってしまう。そう考えたアニタは咄嗟に口を開いた。

「ま、待つてください。その二人は悪くありません」

アニタが言葉を発した事により、室内全員の視線がアニタへと向かう。平常時なら怖くて話をするところではない。けれど、そんな事に構っている場合ではない。

今自分が何とかしなければ、大切な人まで巻き添えにしてしまうのだから。

「私が惑わせただけです。だから、二人には危害を加えないでください」

「何言ってるんだお前！？ お前は何にも」

「少し黙ってて！ お願いだから」

アニタの切実な願い。それはフランにも届いたらしく、兵に当たる寸前で拳を止めていた。

フランが拳を止めた直後、兵は一斉にフランを取り囲み、剣と槍を突きつけフランの動きを封じる。そして、兵の一人が大きな声をあげると、診療所の入り口から一際目立つ格好の男が入ってきた。

「いやいや、美しい友情じゃないですか」

ダルマティカの上にコープをまとい、紫色のカロットを被った男は手を叩きながら皮肉交じりにそう告げる。そして、アニタを一瞥するや苦笑いを浮かべた。

「魔女と言うから武装した兵を出向かせたんですが、まさかこんなに可愛らしいお嬢さんだとは……」

「見た目に騙されないでください。この魔女は、自らリヴィングストン卿の息子他一名を惑わしたと告白しております」

「そうなんですか？ これほど幼いのに魅惑の魔女とは恐れ入りますね」

アニタはじつと男を見る。格好や兵からの扱いを考えると、この男が街の司祭である事は間違いない。つまり、司祭を言いくるめる事が出来れば、少なくともフランとルークの二人は助ける事が出来るということ。

何をどう話せば司祭から二人の目をそむける事が出来るか。アニ

タはその事だけを必死で考えた。しかし、そんなアニタの思いとは裏腹に司祭は拍子抜けするような言葉を口にする。

「で、他にはどんなことをしたんです？ それだけでは、ルクレーシャスとこちらの青年がロリコンであつたというだけのことでしょ」

魅惑の魔女と言えば、妖しの術で男を惑わせるもの。その術に理屈は必要なく、多くの男を惑わせる事だけが条件となる。それなのに司祭は二人がロリコンであれば話は片付くだろうと言つてのけた。これならば、自分も罪に問われないかもしれない。余計な事さえ言わなければ、これ以上疑惑はかからないのではないかと。アニタはそう考えた。

しかし、その希望は兵の発した言葉によつて打ち砕かれてしまう。「いえ、ローランド殿の話では、境界線の上の魔女だと言う話です」兵の言葉を聞いた司祭はアニタの前までやってくると、アニタの顔を覗き込むように見て言う。

「境界線の上の魔女……ですか？ こんな少女が」

「はい。物的証拠はリヴィングストーン卿の息子にあられる、ルクレーシャス様自身だとか」

「なるほど。では、見せてもらいましょうかね」

半信半疑の眼差しでアニタを見ていた司祭は、兵の言葉を聞きルークの方へと視線を移した。

その時点でアニタは諦める。ルークの足を見られなければ証拠などどこにも無い。だから、ルークの足さえ見られなければこの司祭ならやり過ぐす事が出来る。そんな風に考えもした。だが、よくよく考えればありえない事なのだ。

ここに兵を派遣している時点で、どんな魔女が現れたのかを絶対に聞いているはず。何も聞かずに、これだけの兵を連れてくるような人物が司祭になどなれるわけがない。

つまり、今までの言葉が全て演技だということもありえるのだ。アニタは目を閉じ視線を下げる。それと同時にルークの足を見た

司祭が驚愕の声をあげる。

「これは凄……これをこの少女がやったと言つのですか？」

司祭の問いかけに、兵は肯定を示し首を立てに振る。すると司祭はしばらく何かを考えたあと、にやりと笑みを浮かべた。

「……確かにこれは魔女の仕業。人にこのような治療が出来るはずも無い」

「では、どういたしましょう？」

「彼女を境界線の上の魔女の重要参考人として連行してください」
口を挟む間もなくアニタの連行が決定する。そして淡々と話は進んでいく。

「残りの二人はどうすれば？」

「放っておいて構いません。魔女が自白したのでしょう？ 二人を惑わせたと」

「はい」

一応返事はしたものの納得していないのか兵の言葉に覇気は無い。しかし、そんなことはお構い無しに司祭は話を続ける。

「なら、二人に罪はありません。もっとも、魔女に治療を受けているルクレーシヤスには魔女裁判が終わった後に話を聴くことになりますが」

この言葉を聞いてアニタは安心する。少なくともフランとルークの二人が罪に問われる事がなくなったから。

「解りました」

「それでは連れて行ってください」

「はっ！」

兵に連れられる間際、アニタはフランに声をかける。

「フラン！」

アニタの声に反応したフランは、顔だけをあげこちらを見る。その表情にはいつものような気持は感じられない。仕方ないと言えば仕方ないことだが、そんなフランを見ているのはアニタも辛い。だからアニタは別れの言葉を口に出す。

「今までありがとう。私なんかのこと好きになっでくれ。あと……」
そこまで言っでアニタはぽろぽろと涙を流し、声にならない声で
言う。

「皆にごめんなさいって伝えておいて」

第三章（間章）

アニタが連れて行かれた先は、教会の地下にある牢獄。換気が全くされていないせいか、空気は淀み鼻につく臭いが充満している。それでも気分が悪くなりそうなのに、何らかの罪を犯し教会に捕らえられている者たちがアニタが通るのを見ては、収容されている部屋の鉄格子から手を出し声をかけてくる。

『そいつをこっちによこせ』

『こっちに来いよ。可愛がつてやるから』

『何したんだてめえ？ 可愛い顔して怖いもんだ』

様々な罵声と卑猥な誘い。彼らの手が届く事はないと解っている、思わず身体が強張ってしまう。どんな罪で捕まっているのか知る事は出来ないが、少なくとも声をかけてきた者たちが反省をしていると言う事は無いだろう。万が一にも、あのようなもの達と同じ部屋に入れられたらと思うと怖くて仕方ない。

アニタはぎゅっと手を握り、強張って動きづらくなった足を無理矢理動かすと、黙ったまま司祭についていく。どんなに司祭のことが気に食わなくても、今はそれが一番安全だから。

そして、牢獄を一番奥まで進んだところで司祭が部屋の鍵を開ける。

「しばらくの間、ここに入ってもらいますよ」

そう言われ、アニタが入れられた部屋には誰も居ない。だが、過去に誰かが入れられていたのは部屋の様子からも容易に想像できる。備え付けられた拘束具には酸化して黒ずんだ血がこびりつき、壁には自らの無罪と、魔女では無いとの思いが血で綴られていた。

これから先、どんなことをされるのか、自分も同じ目にあうのかと思うと怖くて怖くてたまらない。けれど、アニタは声を出さずにはいらなかった。

「どうして…… どうして、こんな事が出来るんですか!？」

見てしまったから。汚れできちんと読み取る事が出来なくなつた最後の文字を。だから声をだした。震える体と震える声に鞭打つて。そんなアニタの問いかけに、司祭は的外れな答えを返す。

「どうして？ 自分の胸に聞いてみなさい」

「私のことを言ってるんじゃないやありません」

自分の胸に聞いて解るはずが無い。こんな酷い事をアニタはしよ
うとすら思わない。

「では、何を言っているのです？ 私には皆目見当もつきませんが」
「どうして何の罪も無い人にこんな事が出来るんですか！？」

鉄格子を叩きつけ、アニタは声をあげる。

確かに書かれていた。壁に綴られた文字に、人を助けるための医
術を魔女の扱う術と言われ、何の罪も犯していないのに魔女として
村ごと焼き払われたと。汚れで消えていきそうな文字の中に、クラ
フトという名が。

もしかしたら、ただの勘違いかもしれない。けれど、アニタの知
る限り魔女の巣狩りにあつた村はクラフト村だけ。これがただの偶
然であるわけが無い。

アニタが必死で思いをぶつけるも、司祭は小さく笑う。そして、
アニタの手が届く距離まで顔を近づけにやりと笑みを浮かべた。

「いいでしょう。冥土の土産ということで教えてあげようではあり
ませんか」

そう言つと司祭はアニタに背を向け、向かいにある牢屋の前で振
り向いた。

「以前そこに入っていたのは、あなたと同じ命を操る魔女です。名
はデニス・ウィッチクラフト。魔女の巣で、もっとも偉大な魔女」
司祭から告げられた名前を聞き、アニタの中に怒りがこみ上げて
くる。

あの時は何も出来なかった。ただ逃げる事しか出来なかった。け
れど今は、目の前に村を襲わせ村一番の技術を持っていたデニスを
殺したものがいる。感情を押し隠す事などできるわけが無い。

アニタは鉄格子を掴み、司祭に怒鳴りつけた。

「デニスおばさんに何をしたの!？」

「デニスおばさん……そうですか、そうなんですか。やはりあなたは、魔女の巢の生き残りなんですね？　これはいい」

しかし、アニタの言葉を聞いた司祭は薄気味悪い笑い声をあげ、さらに続ける。

「聞きましたよ？　魔女の巢には十代にして全ての技術を習得した神の子がいると」

「だから何なんですか！　そんなことより、デニスおばさんをどうしたのよ」

魔女の巢だとか村に神の子がいたとか、今はそんなことどうでもいい。今知りたい事は、デニスが生きているかどうかという一点だけ。

だが、司祭から帰ってきたのはあまりにも納得のいかないものだった。

「殺しましたよ。人の体を切り刻む、殺戮の魔女としてね」

「そんな……」

解ってはいた。解ってはいたが、少しの可能性を信じたかった。けれど、突きつけられたのはデニスが死んだ、殺されたと言うこと。それが事実だと言う確証はどこにもないが、司祭が嘘をつく理由もないだろう。

アニタは膝をつき涙を流す。すると、司祭は人とは思えない言葉を口にした。

「まあ、そんな些細な事はこの際おいておきましょう。問題は、あなたが我々に協力するかどうかと言う事です」

良く知っている人間が殺される。それはアニタにとっては重大な事。しかし、司祭はさらりと言ったのだ。

些細な事だと。

人の命をなんとも思わないこの発言に、アニタは冷静さを完全に失ってしまう。

「……あなたたちに協力なんかしない」

凍るような冷たい視線を司祭に向けアニタは言い切った。しかし、司祭もその程度では引き下がらない。

「そう慌てないください。あなたは魔女ではなく神の子。協力さえしてくれば、あなたは幾万もの命を救えるのです」

アニタのことを魔女ではなく神の子と言い、多くの人も助けられると司祭は言う。

しかし、今のアニタにそんな交渉は無意味だった。

「あなたたちのために、あなたたちの利益のためだけに、人助けなんて絶対にしない」

アニタは尚も否定の言葉を口にする。だが、やはり司祭は引き下がらない。

「では、魔女として死にますか？ 嫌でしょう？ 夢半ばに散り行くのは。それに、私たちの利益のためとはいえ命を助けられるんですよ？ あなたたちクラフト村に住むものからすれば、多くの人命を救うことこそが生きがいと言うもの。悪い話ではないと思います」

魔女として死ぬか。この言葉でアニタは冷静さを取り戻す。

この言葉のせいで、どれだけの知り合いが、どれだけの人間が罪もなく殺されてきたのか。そう考えたら、やはり協力などできるわけが無い。

「……確かに人の命は救いたい。直せる病は治してあげたい。けど、あなたたちに利用されるぐらいなら、協力するぐらいなら、私は魔女として死にます」

これがアニタの答え。それ以外の答えなど出せるわけが無い。

どれほどの人が、魔女として殺されてきたか解らない。けれど、その中には家族を持つものも居ただろう。愛する人がいたものも居ただろう。どんな条件下でさえ、魔女として教会につかまれば死刑は免れない。

それなのに、自分だけが教会に協力して生きながらえるなどどう

して選べよう。

「あなたたちに協力するということは、村の人を、私を逃がしてくれた人たちを裏切るということ。そんなの私には出来ない」

アニタは真つ直ぐと司祭を見てそう告げる。絶対に変える事の無い意志を胸に秘め。

すると、そんなアニタの気持ちに気がついたのか、司祭は残念そうに呟いた。

「そうですか……では仕方ありません。数日後、あなたに神の裁きが下るでしょう。魔女の巢の神童、アスクレピオスの再来。境界線の上の魔女として、それに相応しい裁きが。」

「まだ三日目だというのに……随分か弱い魔女なんですネ」

アニタが牢屋に入れられてから三日。朝なのか夜なのか、松明の灯りしかない牢獄では知る術もない。仮に体感時間で時間を測っていたとしても、それが当てになる事はない。アニタにとってこの環境は、苛酷という言葉が生易しく聞こえるほど劣悪なものだから。

誰が言ったかは知らないが、天国にいる一時間は一分しか経っていないように感じ、地獄にいる一分はどんな一時間よりも長いとはよく言ったものだ。一週間以上経っていると思っていたのに、三日しか経過していないのだから。そんな事を考えつつ、アニタはぐったりと倒れたまま牢の前にやってきた司祭の方へ視線を向ける。

「前言を撤回しましょう。その状態でよくも反抗的な目が出るものです」

呆れたように見下ろしてくる司祭に、アニタは尚も視線を向け続ける。決して目を逸らさず、司祭を調子づかせない為に。

そんなアニタの思惑を察したのか、司祭は小さく首を振ると溜息をついて手をあげる。

「解りました。ですからそんな目で見ないでください。今日は話が

あつてきたんですから」

思わずアニタは眉を寄せた。この場で司祭が始める話など数が知れている。裁判にかけられる日取りが決まったか、フランやルークに対してのこと。それ以外の話をする必要などどこにも無いのだから。

けれど、司祭が始めた話はアニタが考えていたものとは全く別のものだった。

「貴女はオフィーリア・アムダステルという機工士を知っていますね？ もし知らなくとも、名前ぐらいは聞いたことがあるでしょう」司祭からの問いかけにアニタはルークとローランドの会話を思い出す。あの二人が話していた中に、オフィーリアという名前が出てきていた。

ローランドは魔女といい、ルークはそれを随分と嫌悪していた。とはいえ、こんな話をする必要がどこにあるのか？ アニタは司祭を見ていた目を怪訝そうなものへと変える。

しかし、そんなことはお構いなしに司祭は続ける。

「彼女は、創生の魔女として我々教会に捕まりました。危険でしょう？ 人を簡単に殺傷できる兵器を、いとも簡単に創り出すのですから。ですが裁判の結果は無罪。リヴィングストン卿の第二子、ルクレシーヤスに出し抜かれましてね」

驚かずにはいかなかった。教会に魔女として捕まったものが無罪になる。そんな話をアニタは聞いたことが無かったから。アニタは目を大きくし、ぽかんと口を開いて司祭の言葉の意味を探ろうとする。しかし、そんなものはいくら考えても解るわけが無い。

アニタの表情が驚いたものから不可解なものへと変わった瞬間、司祭は小さく声をだして笑った。

「お気持ちには察しますよ。なぜ教会が魔女として捕らえたものが無罪になったのか……けれど、貴女には考えても解るわけが無い。なにせ、私たちですら予想もしていませんでしたから」

そこまで言って司祭は一呼吸置くと、

「ですが、ルクレーシヤスは支払ったんですよ。たった一人の魔女を助けるためだけに、この街で魔女裁判の全権を持っている人物へロンド金貨二百枚もね――！」

徐々に声を荒らげ怒りをぶちまける。悔しかったのだろう。魔女として捕らえたものが裁判で無罪になった事が。

しかし、アニタには解らない。なぜ金を支払った程度の事で裁判の判決が変わったのか。通常の裁判にかけられたなら、どんな地域で判決を言い渡されようが魔女に下される判決は死刑と決まっている。たとえ大金を積まれようと、国や教会が判決を変えるとは考えにくい。

「だから、今回は万全の策を練らせていただきました。我々教会が、貴女に有罪と死刑判決を下させるため、フィアナ・ウッドヴァイン――つまり、魔女裁判の全権をもっている人物に支払った金額は、ロンド金貨三百枚。ルクレーシヤスが所有している資産の上をいくものです」

アニタはこの言葉を聞いて驚愕する。

ロンド金貨はこの大陸でもっとも価値の高い貨幣であり、一人で生活をしていくのなら贅沢さえしなければ一枚で二ヶ月近く衣食住に苦労はしない。それを確実に有罪にするために三百枚――馬鹿げているにも程がある。

とはいえ、これを馬鹿げていると言うならルークが過去に出した金額も馬鹿げていると言える。オフィリアがルークとどのような関係にある人物か解らないが、それでも金貨二百枚を用意してまで助けたいと思うだろうか？　いかに公爵の息子と言えど、ロンド金貨二百枚が安いはずが無い。諦めるのが普通なのだ。

そんなことをアニタが考えていると、

「おや？　その顔を見ると、貴女はルクレーシヤスの夢を知らないようですね」

知らなかったのかと言わんばかりに司祭は笑い声を漏らしながら尋ねてくる。

ルークに夢があることは知っている。その夢のために医療を学んでいることも。

だが、その夢が何かと聞かれるとアニタは知らない。ルークはそこまで話してくれなかったから。

アニタは俯いて黙り込むと、それを肯定の意と受け取ったのか司祭は聞いてもない事をベラベラと話し出した。

「ルクレーシャスは全ての魔女や悪魔憑きと呼ばれるものを無くそうとしているんですよ。そのため、たった一人でありとあらゆる事を学び、ありとあらゆることを実践する。今ではオフィリアの持っている知識や技術は一通り扱えるようですし、医学面においては貴女には及ばないものの、一般的な魔女や悪魔憑きと同程度の技量は持っていると考えてまず間違いありません」

レノンへの道中でルークが言っていた、

『私がこれくらい出来ないようでは、私の夢を実現させる事は出来ない』

この言葉の意味をアニタは今になって理解する事が出来た。

確かに、全ての魔女や悪魔憑きと呼ばれるものを無くすためにはそれぐらいは出来なければいけない。いや、それが出来なければ話にもならない。

他を卓越した技術や知識を持つものが魔女や悪魔憑きと呼ばれる所以の多くは、それらが持っている技術を真似できるものがないから。真似が出来ないから、魔女だの悪魔と契約したのだと言われるのだ。

つまり、その魔女や悪魔憑きの持っている技術の理を聞いた一般の人間がそれらを容易に真似できれば、その魔女や悪魔憑きはただの技術者に成り下がる。

「だから、ルクレーシャスは危険なんです。あれがリヴィングストーン家に属していなければ、とうの昔に悪魔憑きとして捕らえている」
そこまで言うと、司祭はにやりと笑いアニタに背を向けた。

「しかし、それも時期に終わります。今回の件でルクレーシャスが

貴女を助けに動く場合、確実にリヴィングストーン家との縁を断ち切ってくるでしょう。これは確かな情報なので、間違いありません。そうなれば、何の権威も持たない若者風情捉えることなど、くくく」自信たっぷりと言う司祭の言葉が、アニタは不思議でならなかった。

ルークがアニタを助けるためにリヴィングストーン家との縁を切る理由として考えられるのは、家に迷惑をかけないため。それ以外には考えられない。

だとしても、なぜこうも言い切れるのか？

確かな情報というのが誰からもたらされたものか解らないが、ここまで確信を持てるのはおかしい。しかも、司祭の言葉には矛盾がある。

ルークがアニタを助けに動く場合に家との縁を切ってくると言っているのに、ルークを捕らえられる事が出来るという確信に満ちた笑い。

司祭はルークが助けに動く事を知っているが、あくまでも可能性があるような言い方をし、事実をアニタに隠しているという事になる。

アニタがじつと司祭の方を見ていると、視線に気がついたのか司祭は振り返ってアニタを見下ろした。

「どうやら、私が考えているよりも貴女は利口なようだ」

やれやれと言った様子で両手を広げた司祭は、

「良いでしょう」

鉄格子の前であぐらをかいて座り込んだ。

「まず、貴女の裁判を行うフィアナ・ウッドヴァインですが、これには教会も手を焼いています。どうやって情報を仕入れているのか解りかねますが、何せ知らない事が無い。貴女の件で彼女を訪ねたとき、何と言われたと思いますか？」

ありきたりな答えを言うなら、何のようだ？　これが一番ポピュラーな回答だろう。何の用か解らないのに、どんな答えを返せとい

うのだ。

「想像つきませんよね？ 普通なら、貴女が考えた通りのことを言われるでしょう。『何のようだ？』と。しかし彼女は違う。『用件は把握しているから金だけ置いて行け。あと十数分で客が来るんでね』こう言っただけです。ですから、どんな客が来るのかと見張っていたら……確かに着ましたよ。ルクレシーヤスト、貴女のご友人が」そんなふざけた事があるはずが無い。用件も聞かずに用件を把握しているなんて。その後にフランやルークが尋ねると連絡を入れていたから、教会関係者と鉢合わせになるのがまずいと考えるその場しのぎで言っただけに違いない。

だが、アニタの考えは司祭の次の言葉で斬り捨てられる。

「そして、二人が帰った後にもう一度尋ねたんですよ。そうしたら私を見るなり彼女はこう言っただけです。『蹴りはした交渉だが、一応伝えておこう。リヴィングストンの坊やが提示してきたのはロンド金貨二百四十枚で、アニタ・レインフィールドの無罪判決を出す事だ。中は確認していないが、お前たち協会側は三百枚だろう？』

判決はアニタ・レインフィールドに境界線の上の魔女として有罪判決をだし、死刑の火あぶりで良かったんだな？』とね」

これは司祭の作り話だ。アニタはそう思わずにはいらなかった。アニタを境界線の上の魔女として通報したのは、ローランドでありフィアナではない。それどころか、フィアナがアニタのことを境界線の上の魔女だと知る機会が存在しない。

それなのにフィアナは教会が望んでいたことを用意に汲み取り、アニタが境界線の上の魔女だと言っただけでいる。

「驚いたでしょう？ ですがこれは、作り話ではなく真実です。ゆえに彼女はそれを知っている者たちから、天秤のフィアナではなく全眼のフィアナと呼ばれているんです。全てを見る目を持っているという意味でね」

そんな話を信じられるわけが無い。

仮に信じるとするなら、なぜ教会はフィアナを魔女として捕らえ

ないのか？ 魔女や悪魔憑きと言われるものたちの技術を誰も真似出来ないのであれば、フィアナの持つ異常な力も真似できる物ではない。

「どうしてその人は捕まえないんですか？ 誰にも真似できないでしょうそんなこと」

「確かにそうです。正直言って魔女として捕らえたい事は否定しません。ですが、それをするにはリスクが高すぎる。彼女の持っている教会の裏事情も要因の一つですし、何より精鋭百名集めたとしても彼女を捕らえられるかどうか……。だったら、捕らえるよりも利用した方が良いでしょう？ 毒を制するには毒を持つしかないんですよ」

自分が最低なことを言っているのをアニタは解っていた。けれども、言わずにはいられない。こんな理不尽な理由で、魔女とするかどうかの基準を決められていたのでは今までに魔女や悪魔憑きとして殺されたものが可哀相過ぎるから。

「お気持ちには察しますよ。ですが、彼女を憎いと思うのは筋が違います。何せ、彼女は誰にでも公平。全ての事象を自らの天秤にかけ、それに釣り合った対価を出すものにはどんな情報も渡しますしどんな判決も下します。ですから、仮に彼女が教会と他の何かを天秤にかけたとき、他の何かの重さが勝れば教会が破綻するような情報さえ渡してしまうでしょう。逆を言えば、彼女の命すら上回る物を渡せば、彼女は自らの命すら捨てます。それゆえに天秤のフィアナなんですから」

「……だとしても、それは」

「おかしいと思うなら用意なさい。彼女の天秤を動かせるだけのものを。ルクレーシャスと貴女のご友人は、そうしようとして届かなかっただけではありませんか」

アニタは何も言い返せなくなる。

この司祭がどんなに理不尽な事を言っていたとしても、フランとルークの二人がそのルールに乗った上で状況を好転させようとした

のなら、それを否定するなんてことは出来ないから。

もし、司祭の言うフィアナのルールを否定してしまえば、自分を助けようとしてくれた二人のことまで否定してしまうようにアニタは感じたから。

「そうそう。落ち込んでいる貴女に言っておかなければいけない事があります」

そう言い出した司祭は、渋々と言った感じで言葉を続ける。

「『何の心配もするな。絶対俺が助けてやるから』と貴女のご友人から。『私のせいで済まない。手を尽すから安心していてくれ』とルクレーシヤスからの伝言です」

この言葉を聞き、一瞬だけアニタの表情は明るくなる。

どうしようもない絶望の中で、知った二人がこのようなことを言ってくれるのは希望となる。けれど、どのようにして助けるのか？ そんなことを考え始めると、アニタの表情はたちまち曇っていった。

「忙しい人ですな貴女は。希望など抱くだけ無駄というものです。今の伝言を告げたのはフィアナ・ウッドヴァインに頼まれたからですが、そのおかげでこちらとしても別の用意ができましたね」

司祭の顔に不安の色は無い。フランとルークがどんなことをしてきても、それを打ち破る自身があるという事だろう。それは推測でもなんでもなく、司祭の言葉が物語っていた。

「仮にルクレーシヤスが夢を諦め家督を継ぐといえ、リヴィングストン公爵はルクレーシヤスに家督を譲るでしょう。そうなれば、ロンド金貨千枚は用意してくるはず。正直、前情報なしでこの金額は払えない。ですが、その可能性があると解っていれば話は別です」

くくくと笑いを漏らし、司祭がアニタのほうをじっと見る。しかし、アニタは何の反応も見せなかった。

アニタにとって、フランとルークが助けに来てくれるかもしれないというのは嬉しい事。だが、その後の司祭の話は想像の域を超

えている。ロンド金貨三百枚でも驚いたのに、千枚と言われても想像できないから。

「……つまらないですね。もう少し絶望に満ちた表情をしてくれると面白かったのですが」

アニタが何の反応も見せないで居ると、司祭はそう言って何処かへ行ってしまう。

アニタはぼーっとながら司祭の言っていたことを順番に思い出して、自分に出来る事が無いかを考え始める。

けれど、何をどう考えても出来る事など思いつかず、じっとしていることしか出来ない無力さに絶望していた。

第四章 01

魔女の公開裁判と言うのは珍しい。

通例ならば関係者だけを集めた場所でひっそり行われ、その結果と刑の執行場所を刑の執行がされる都市に住む者たちにだけ教えられる。

それが本来あるべき魔女裁判のあり方。

けれど今回は、通例通りと言うわけには行かなかった。

大通りが重なる中央広場。いつもなら、街の住民や商人たちがごった返している昼時に、教会関係者と魔女裁判の権限を持つフィアナが現れた。しかも、それらの周りを教会が有している傭兵たちが固めるとなればただ事ではない。街の住民たちは何事だといった表情で、一步距離を置き様々な推測を近場に居るものと話し合っている。

しかし、フィアナはそんなことを気にする様子も無く、用意されたニメートルはあろうかと言う移動式の台の上に上り住民たちを見下ろした。すると、全身を黒で覆ったフィアナの異様な雰囲気圧倒されてか、ざわめいていた住民たちは皆が固唾を飲はじめ、徐々に広場は静寂と化していく。

喧騒が一切聞こえなくなると、フィアナは小さく息を吐き胸を張る。

「これより、アニタ・レインフィールドの公開裁判を、フィアナ・ウッドヴァインが行う」

フィアナが言うと、住民たちは皆が不思議そうな顔を作る。

裁判を見慣れていないせいもあるだろうが、それよりもアニタ・レインフィールドという人物を知らないのが一番の理由。だが、そんな疑問は一瞬で吹き飛ぶ事になった。

「被告人アニタ・レインフィールドは、先日教会関係者により魔女としての疑いをかけられ捕らえられたものである。そして、被告人

に対し教会及び裁判関係者が行った起訴記録の証拠調査結果及び被告人自身の自白により、被告人アニタ・レインフィールドを、命を狩り授ける境界線の上の魔女とすることをここに宣言する」

この宣言に住民たちはざわめきたつ。

アニタ・レインフィールドが誰かなどはどうでもいい。教会がアスクレピオスと同じ二つ名を持つ魔女を捕らえた事に歓喜の声をあげたのだ。

「よって、境界線の上の魔女アニタ・レインフィールドには、リビングストン家顧問医師であるローランド・マイヤーズ氏の告発通り、世界に害をなす凶悪な魔女として死刑判決を言い渡す」

そして、フィアナが刑の内容を言い渡すと同時に、住民たちはフィアナと教会を褒め称えた。

「刑の執行は翌日正午。一時間前にはこの場で十分間首枷台による晒し刑を行い、その後西の広場にて火あぶりと処す」

死刑宣告が出されたと司祭に聞かされたアニタは、一人牢の中で考え事をしていた。

判決が出たと言う事は、間違いなく明日には火あぶりにされ殺される。だが、正直なところまだ死にたくないし、死ぬとしても火あぶりなんて苦しい死に方はしたくない。

だったらどうすればいいのか？ アニタはそのことだけを必死で考える。

理想的な結果だけをいえば、判決が取り消される事。それが誰も傷つかずに済むし、一番手っ取り早い。けれど、どれだけ望んでもそれはありえない。なら、次に考えられる事――

それは、フランとルークが助けに来てくれることだ。

二人に迷惑をかけることにはなるが、現状で助かる確率が一番高い。司祭の話を聞いていた限り、恐らくではあるが何らかの行動を

取ってくれるだろう。それに賭けるしかない。そんなことを考えた瞬間、アニタは思わず奥歯を噛み締めた。

自分に出来る事が本当に何も無いのか？

誰かにすぎるしか助かる方法がないのか？

悲劇のヒロインを気取っているだけでは、何も変えることなど出来るわけが無い。

アニタは鉄格子の前まで行くと、今まで食べようとすら考えなかった食事に出した。

ひび割れた皿の上に乗せられているパンはガチガチに固まっていて、水でふやかさなければとても食べられるものではない。それなのに、器に入れられた水の量はごく僅か。パンをふやかして食べるか、水を飲むかの選択肢しか存在しない。

だが、アニタは即断する。

水を飲んでしまえば、パンを食べる事は出来ない。けれど水でふやかしたパンならば、空腹を満たし尚且つ水分補給もすることが出来る。もちろん、それで喉の渇きが消えるわけではないが、身体のことを考え少しでも体力を戻そうとするなら答えなど選ぶまでも無かった。

アニタはパンを水の入った器に放り込むと、ただただパンがふやけるのを待つ。

しばらくすると、硬かったパンの表面が水分を吸収し始め、少しずつ器の水が減っていく。残しの水量を考えれば、水を全て吸いきっても硬くて食べられないかもしれない。するとアニタは、器の中に手を入れぐしゃぐしゃとパンを揉み始めた。じっと待っているよりは食べられるようになると思ったから。

しかし、アニタが器に手を入れた直後、それを否定するように小さな笑い声が聞こえてきた。

「食事は今まで一度も取っていなかったはずだけれど……最後の晚餐かいそれは？」

声のしてきた方にアニタが目をやると、そこに居たのは見たこと

のない全身を黒で染めた女性が立っていた。

見た目は二十代前半。真っ直ぐな黒髪に、漆黒の外套。松明の揺らめく灯りのせいか、陶器のような白肌が見るもの全てを惹きこむ魔力を帯びているようにさえ感じてしまう。

思わず女性に見蕩れてしまったアニタは、器の中に入れた手をいつの間にか止めていた。

すると、それに気がついたのか女性は再び小さく笑うと、しゃがみ込んでアニタの近くまで顔を近づけてくる。

「にしても、可愛い顔をしている。視るのと見るのでは印象が違うね」

微笑みながら賛辞の言葉を述べる女性。普段なら顔を紅くするような言葉に、アニタが感じたのは全く別の印象だった。

笑ってこそいるが、その瞳の奥は無機質で光りすら受け入れようともしない闇。

友好的で敵対心などまるで感じられないのに、こみ上げてくる畏怖の感情。

アニタは地面にお尻をつけたまま少しずつ後ろに下がると、思わず口を開いてしまう。

「……蜘蛛？」

自分が何を言ったのかに気がついて咄嗟に口を押さえるが、その言葉は女性に聞こえていたらしい。女性はきよきよと辺りを見渡し、辺りに蜘蛛などいない事を確認すると大きな声をあげて笑い出した。

「リヴィングストンの坊やと、オルブライトの坊やが惹かれるのも納得したよ。それを言い当てられたのは初めてだ」

言うてはいけない事を言ってしまった。そう思い口を押さえたアニタだが、満足気に笑う女性を見て先ほど覚えた畏怖の感情は消えてしまっていた。『蜘蛛』という立った一言を発しただけで、女性からつける印象が見違えるほど変わったから。

心に僅かな余裕が生まれたアニタは、女性が何者なのかを考え出

す。

アニタが食事を取っていない事は、教会の関係者に聞けば解る事別に知っていても問題はない。けれど、『視ると見るのでは印象が違う』という発言。誰かにアニタの容姿を聞いたのではなく、どこかでこの女性アニタのことを視た事があると考えるのが自然。聞くで見るとでは、などと言い間違えるわけがないから。

そして蜘蛛と言った事により、それを言い当てられたのは初めてという返答。

間違っているかもしれない。

けれど、アニタには目の前の女性がなんであるか推測する材料があった。

「もしかして貴女は……」

その推測を口に出そうとしたとき、女性は自身の口元に指を立てこれ以上喋らないようにと黙ってアニタに告げる。

これにより、アニタは自分の推測が正しかったのだと確信した。

彼女が自分たちのような教会に作られた偽りの魔女ではなく、真正銘の魔女なのだと。

彼女が、フィアナ・ウッドヴァインだという確証はどこにもないけれど、司祭の話などから考えればその可能性は極めて高い。だとすれば、彼女を説得する事さえ出来れば死刑どころか有罪判決すら引き下げさせる事が出来る。

つまり、彼女に対し絶対的な交渉権を得たアニタが交渉をしない理由などどこにも無い。

だからアニタは口を開く。

「私は魔女じゃない。死にたくありません」

「死にたくないね……確かにあたしならそれを実現してやれる。けど、お嬢ちゃんは何を差し出してくれるんだい？ あたしの天秤はお嬢ちゃんの想像よりも遥かに重い」

このやり取りで可能性は事実が変わった。

名乗られたわけではないので、証拠などどこにも無い。けれど、

アニタが死なずに済む結末を用意でき、何かを差し出し天秤にかけてくれると言うのなら、彼女が司祭の言っていた裁判官フィアナ・ウッドヴァインで間違いない。

アニタはフィアナの問いかけに少し考えた後、はっきりと答えた。「私が差し出すものは、無限の蜘蛛の女王が誰であるかを一切他言しない事です」

するとフィアナは甲高い声でしばらく笑い続け、アニタの目の前まで勢いよく顔を近づけてきた。

「境界線アスクレピオスの上の魔女・アニタ・レインフィールドの頼み、無限の蜘蛛アラの女王・フィアナ・ウッドヴァインが確かに承ろっ」

この言葉を聞いてアニタはほっと胸を撫で下ろす。どんな方法をとるのか解らないが、それでもフィアナが約束を違えるとは思えない。

「だが、完全に約束できるわけじゃない。手段は用意してやるから、後は自分で何とかするんだね」

安心してきっていたアニタにかけられたのは、フィアナからの絶望的な言葉。

フィアナが無限の蜘蛛の女王であることを他言しないだけでは、死なないことを完全に約束できない。つまり、確実に助かるためには他にまだ何かが必要だということ。

アニタは口を開く事も出来ずにただ呆然とする。

するとフィアナは小さく溜息をついた後、自分を弁護するように言葉を付け足した。

「勘違いをしているようだから言うておくが、お嬢ちゃんの持ちかけてきた材料はこれ以上ない最高のものだ。判決を出す前なら無罪判決を出している」

「だったらどうして!？」

「簡単だよ。一度出した判決を取り消すなんて事は出来ない。できる事と言えば、お嬢ちゃんを逃がすか交渉裁判に持ち込むのだが…あたしが直接逃がすなんて事出来るわけが無いし、教会が交渉を

受け付けるとも思えない。だから、最良の手段を用意させてもらう。それで助かるかどうかは、お嬢ちゃんとあの二人次第だ」

そう言うと、フィアナはどこから取り出したのか熱そうな液体の入っている器をアニタの前に差し出してきた。

「あと、腹が減っては戦は出来ないといいからね。そんなものよりこっちの方が良いだろう？」

それはフランといった薬膳料理店で見たものだった。

あの時は汁物が欲しいという理由で頼んだが、今この場に持つてこられるものとしては最高の料理だ。

栄養価の高いスープは飲み物という事で簡単に摂取でき、それでいて身体も温まる。

また、スープの中に木の実や鶏肉などが入っている事から、多少ではあるがお腹も膨れる。

アニタはフィアナからの差し入れを遠慮することなく受け取り、少しずつ口に運んでいく。

そして、スープを飲み終えたアニタはフィアナに軽く頭をさげ礼を言うと、間もおかずに質問を投げかけた。

「ところで、フィアナさんの言う手段というのはどんなものなんですか？」

これを聞いておかなければ、用意や心構えが出来ない。そう思いアニタは尋ねたのだが、フィアナは小さく笑い首を横に振った。

「明日ここを出れば解る。それまではゆっくり休んでな。休息も大事だから」

その時、アニタは急激な睡魔に襲われた。

「フィアナさん……さっきの食事に………」

睡眠薬を入れていたんですね。

その言葉を口にするよりも早く、アニタの意識は遠のいていった。

第四章 01（後書き）

GA文庫大賞（締め切り11月30日消印有効）に応募予定作品の短編を、ブログに公開してみました。
興味のある方は一度見てみてください。

第四章 02

「起きなさい」

身体が揺れているように感じたアニタは、ゆっくりと目を開ける。視界に入ってくるのは、見慣れた薄暗い牢獄に司祭の足。

「全く……どんな神経をしているんですかね？ 刑が執行される日だというのに、寝息をたてるほどの熟睡とは」

司祭の言葉を聞き、寝ぼけながらアニタは寝る前のことを思い出す。

そして、フィアナから差し出された料理に睡眠効果のある物が入れられていた可能性があったことを思い出すと、勢いよく身体を起こした。

「な、何なんですか貴女は？ 寝ていたと思ったら、今度は飛び起きて……」

ここに閉じ込められてから、まともな食事や睡眠をとっていなかったせいですと身体が重かった。

けれど今は身体が軽い。

アニタは堪らず笑い声をもらす。

「何が可笑しいのか解りませんが、体調は良いようですね」

司祭はゆっくりと牢の外に出ると、そこで手枷と首飾りのようなものを持ってアニタの方をじっと眺めている。どうやら、牢屋の外へは自分で歩いてこいという事らしい。

フィアナがどんな策を用意しているのか解らないが、ここを出れば解ると言っていた。それに司祭が目の前で待っている以上、駄々をこねても無理矢理連れて行かれるのは明らか。

ならば、自分の足でここを出よう。

アニタは手で髪の毛を整え、服についていたゴミや埃を払い立ち上がった。

司祭の所まで行くと、手枷をつけられ首飾りをつけられる。

十字架の周りのこれは、茨だろうか？　ともあれ奇妙な形をしている。

「民衆への配慮ですよ。命を操る魔女ですからね貴女は。その力を封じ込めるためのものが必要でしょう？」

なるほど、とアニタは納得する。

司祭自身はアニタが優れた医療技術を持つていただけの人だと知っているが、刑の執行を見に来る観衆がそんなことを知るはずもない。そんなことを考えながら地上へ向かう通路を歩いていると、アニタの目には不思議な光景が映し出された。

ここに入ってくるときは、罵声と卑猥な事ばかり言っていたほかの囚人たちが牢の隅で身を丸くして震えているのだ。

この一週間ほどで何があったのか？　きよろきよろと震えている囚人をアニタが見ていると、司祭が笑いながら口を開いた。

「あまりにうるさかったので、貴女の罪状を教えました。たちまち身を丸める姿は中々滑稽でしたよ」

通りで静かなわけだ。事情を知らない人間からしてみれば、死刑になるものがどんな行動をとっても不思議はない。

当初の彼らの様子から、死ぬ事がないと思っっているなら反省する事はないらしい。だが、死ぬかもしれないとなれば別なようだ。それは今の様子からも見て取れる。

やはり、簡単に奪って良い命などないのだ。

どんな罪で入れられているのか？　それとも本当は何の罪も犯していないのか？　どちらか解らないが、罪人である彼らでさえ死ぬのを怖いと思っっているのだから。

久しぶりに空の下に出たアニタは異常な光景に息を呑む。

雲ひとつない快晴は、刑を執行するものからも、それを見物する観衆からも喜ばれることだろう。しかし、その空に異質なものが飛

び交っていたとしたら？

五十を超えるターヴィスの群れを見て、司祭がぼそりと呟く。

「どこから沸いて出ましたかね？ 先ほどまでは居なかったんですか」

司祭がアニタを地下の牢獄から連行してくるまでの短い間に、ターヴィスの群れはやってきた。司祭の発言からそれは容易に想像できる。

だが、なぜこのタイミングでターヴィスの群れが現れたのか？

アニタが考えつく答えはたった一つ。

フィアナが何らかの方法で呼び寄せたのだろう。

とはいえ、これほどの大群を追い払う事は困難極まりない。それこそ、刑の執行にあてる兵を全員ターヴィスの討伐に当てなくてはいけないほど。

そう考えたとき、アニタはあることを思いつく。ターヴィスが地上に降りてくれば街は混乱し、その隙に逃げ出せるのではないかと。しかし、そんなアニタの希望は簡単に打ち砕かれる。

「抵抗する様子も無いようですし、これでかまいませんか」

そう言って司祭が用意した物は台車の上に乗せられた、手枷と足枷、そして胴を繋ぎとめるベルトが付いた大きな椅子。見たところ椅子自体が鉄で出来ており、繋がれたまま走って逃げるなんてことは叶いそうに無い。

「さて行きましょうか」

椅子に縛り付けられたアニタは、兵が押す台車の上でじっと考えていた。

逃げるとしたら、この椅子から解放され火あぶりされるための台に移動するとき。しかし、その間にも兵は見張りを止めないだろうし、逃げるタイミングがあるかどうかも解らない。

可能性があるとすれば、椅子から火あぶり台への移動中に、運良くターヴィスが刑が執行される西の広場に下りてくる事。そうなれば、見張りの注意がターヴィスへと向かい逃げられる可能性が出て

くる。

フィアナがどんな用意をしたのか解らないが、ターヴィスがフィアナの策と無関係という事は無いだろうから。

それからしばらくして、中央広場に運ばれたアニタは身体を震わせていた。

見物に來ている観衆の視線が痛いというのもあるが、本当に怖いのはそんなものではない。

ここに来るまで間、何度かターヴィスが街に下りようとしているのを目撃している。

いくらフランが倒した事があるとはいえ、兵の取る警戒態勢を見ればどれほど危険な生き物かは一目瞭然。アニタを見物に來ている観衆に被害が及んでいないのがせめてもの救いだろう。

とはいえ、万が一この場所にターヴィスが下りてきたら、アニタは逃げる事も出来ずにじっとしているしかない。いくら見張りの兵が周りにいるとはいえ、襲われない保障などどこにも無いのだから「眩しいっ」

そんなことを考えていると、突然目に向けて光が飛び込んでくる。誰かの悪戯だろうとアニタは無視をして目を閉じた。しかし、いつになつても光を当て続けられているのが気になったアニタは、光の來る方へと視線を向けた。

するとそこには、手鏡をもったフランの姿が。

見られたことに気がついたのか、フランは大きく手を振って何かを言っている。

（ぜったい、たすけるからな）

口の動きから読み取ると、こう言っているよう。

アニタは嬉しさのあまり泣きそうになった。

司祭やフィアナの言葉から來てくれるだろうとは思っていた。けれど、聞くとその姿を見るとでは全く違う。助かる事が決まったわけでもないのに、変な安心感をアニタは抱いていた。

西の広場に運ばれると、そこには中央広場以上の人が集まっていた。

どこを見ても人の山。

この中にフランやルークが居たとしても見つかることなどできそうにない。

アニタは不安になりつつも司祭に連れられ火あぶり台に移動した。台の上には木製の巨大な十字架が備え付けられており、手や足を縛る部分には鎖が巻かれている。逃げ出すチャンスがないか伺うアニタだが、周りを兵が取り囲んでおり、とてもではないが逃げられる雰囲気ではない。

そのうえ、ターヴィスが襲い掛かってくるという事も無く、あっさりと十字架に括りつけられてしまう。

そして、公開処刑が始まった。

「これより、境界線の上の魔女、アニタ・レインフィールドの処刑を行う」

フィアナが宣言をすると、観衆は声をあげアニタの足元に火がつけられるのを今か今かと待ちわびる。本来の手順ならば、フィアナの宣言が終わった時点で火がつけられるから。

しかし、フィアナの宣言が終わっても火がつけられる気配は無い。観衆がざわめき始めると、機を測ったように司祭が台の上に上がってきた。

「お集まりの皆さんに、見せたい物があります」

縛られたアニタの前で、司祭は大きな声を出し見たことのある鞆を天に掲げだす。

「ここにあるのは、境界線の上の魔女、アニタ・レインフィールドの持ち物です。中には医療道具と思わしき物が多数詰められているが、これを見てもらいたい」

そう言って司祭が取り出したのは、妙な形に巻かれた薬草。観衆

が見ても、そのままでは何か解らないだろう。だが、アニタはそれが何か一瞬で把握する。

「一見ただの薬草ですが、これを取ると……」

レノンへの道中で採取した、ターヴィスの血入り瓶。

「見てください！ 皆さんはこれが何か解りますか？ そう。人の血です」

「違います！ それは人の血なんかじゃない。それは、ターヴィスの血液です」

「あははははは。ターヴィスの血液？ 笑わせないでください。あれの血は強い酸性。こんな瓶の中に入れておくことは不可能ですよ。司祭が勘違いをしているのは無理もない。ルークでさえターヴィスの血液は強い酸性と思い込んでいたのだ。だから、笑われるのは構わない。」

だが、自分たちを正当化するためだけに何の血かなど確認もせず、人の血を持ち歩いていたと言われるのにアニタは我慢できなかった。好き好んで人の血を持ち歩くような狂人は数少ないから。

しかし、そんなアニタのことを気にする様子もなく司祭は続ける。「ともあれ、皆さんはこれを見てどう思います？ 人の血は時間が経てば固まってしまいます。それなのにこれは液体であり続けている。奇妙だとは思いませんか？」

この司祭の言葉に観衆は一人また一人と声をあげて同意し始めた。

「人の血が固まらないなんて確かにおかしい」

「魔女の力がなせる業だ」

「早く刑の執行を」

「境界線の上の魔女に処刑を」

観衆の言葉は同意から徐々に乱暴な物へと変わっていき、最終的には皆が皆、アニタを「殺せ」と大きな声を揃えて出し始めた。

この言葉を聞き、アニタの頬を涙が流れ落ちる。

人の役に立ちたかった。

救える命を救いたかった。

不治の病に苦しむ人を無くしたかった。

それだけのために医学を学び、医術を手に入れた。

それなのに、この仕打ちはなんだろう？ 何か悪い事でもしてしまったのか？ やり場の無い思いが涙となって零れ落ちる。

フィアナがどんな策を用意していたか解らないが、残っている手順が火をつけるだけのこの状況から助かるとは考えにくい。そのうえ、フランやルークも姿を見せない。絶望の底に落ちたアニタには、観衆の罵声も聞こえなくなっていた。

そんな中、アニタは今までの出来事を思い出していた。

クラフト村に居たときの事。

フランたちと出会ったときの事。

この街に来たときの事。

決して長い人生では無かったし、良い思いばかりでもない。むしろ悪い思い出の方が多いくらい。

「……服に………せんか」

もっと色々なことを経験しておきたかった。

「一体………すか」

アニタが思い出にふけっていると、先ほどまでとは違う声が聞こえてきた。

気になったアニタは、声のするほうに視線を向ける。すると、司祭が手に持っていたはずの瓶が割れ、中に入っていた血が司祭の胸元にかかってしまっている。

「えっ！？」

それに気がついた瞬間、アニタの身体が傾いた。

手足を縛っていた鎖が、何かの衝撃で切れたのだ。

台の上に座り込むように落ちたアニタは、ここぞとばかりに走って逃げ出そうとした。だが、その行方を思っても居なかった人物に遮られてしまう。

「悪いが逃がすわけにはいかない」

フィアナに腕を捕まれ、逃げられなくなったアニタはフィアナを

睨み付ける。

逃げるチャンスは今しかなかった。それなのに、そのチャンスをフィアナに潰されるとは考えもしない。アニタは思わずフィアナを怒鳴りつけそうになるが、それよりも早くフィアナが小声で呟いた。「気をつける。動いたら死ぬぞ」

その言葉の意味はすぐに解った。

空を舞っていたターヴィスの群れが次々と観衆や兵に向かって攻撃を仕掛け始めたのだ。まるで何かの合図でもあったかのように。

「どうして……？」

応戦する兵と逃げ惑う観衆を見てアニタは考える。なぜターヴィスがこのタイミングで攻撃を仕掛けてきたのか。

その答えを出す前に、アニタの身体が大きく揺れる。

アニタを抱きかかえたフィアナが、何かを避けるように飛んだから。

何が起こったのかと元居た場所にアニタが目を向けると、胸元をターヴィスに突き刺された司祭の姿があった。

ターヴィスに突き刺された司祭は悲鳴を上げて倒れこむ。心臓に当たったわけではないが、場所が悪い。数分としないうちに司祭は息絶える。間近で見ていたアニタは次は自分が襲われるかもしれないと考え、体を振るわせる。

だが、アニタがターヴィスに襲われる事は無かった。司祭を突いたターヴィスを、フィアナが糸のようなもので捕らえてしまったから。

そしてフィアナは、捕らえたターヴィスを足で踏みつけ大きな声をあげた。

「教会関係の全兵に告げる。そこにいるルクレシヤス・リヴィングストンとフラン・オルブライトに手を上げるとは一切禁止する。今はターヴィスの駆除のみに全力を注ぐ事。境界線の上の魔女は、あたしが逃がさない」

この言葉を境に、兵たちは一斉にターヴィスの駆除へと全力を注

ぎ始める。

兵は円陣を組むものと隊列を組むものに別れ、円陣を組んでいるものたちは盾や剣を使いターヴィスからの攻撃にただ耐えている。それとは逆に、隊列を組んだものはターヴィスが近づいてくるや隊列の形を変えターヴィスを取り囲むようにした後、一斉に剣を突き立て一匹ずつ確実にターヴィスの命を奪っていく。また、ルークやフランも襲い掛かってくるターヴィスを片っ端から打ち落とし殴りつけている。

一匹また一匹とルークにフラン、兵によって駆逐されたターヴィスの数が二十を超えると、ターヴィスたちは声をあげて空高く舞い上がっていった。そして、広場の上をぐるぐると旋回した後、大きな鳴き声をあげ散り散りにどこかへ飛んでいく。

いくら仲間意識が強いとはいっても、これ以上仲間が死ぬ事に耐えられなくなったのだろう。

ターヴィスが姿を消すと、兵たちはルークとフランを取り囲んだ。アニタを助けに来ていたのだから兵としては当然の行動。だが、これから二人がどうなるかを考えるとアニタは声を出さずにはいられなかった。

「お願いだから」

「今より、交渉裁判を始める。一刻を争う事態のため、交渉内容はあたしが勝手に決める」

アニタが声をあげた瞬間、フィアナがそれを遮り声を出した。

これにはアニタだけではなく、ルークやフラン。兵たちもがぽかんと口を開ける。

しかしフィアナはそんな事は気にしないといった様子でさらに言葉をつける。

「アニタ・レインフィールドより、死刑判決及び有罪判決の取り消し申請。尚、これが受理された場合も境界線の上の魔女という二つ名は無くならないものとする」

訳が解らない。

確かにフィアナは最良の手段を容易させてもらうと言っていた。けれど、誰がこんな展開を予想するだろう？

交渉裁判は相手方の承諾が無ければ成立しない。

それはフィアナ自身が言っていた事。

それなのにこれは無茶がありすぎる。

ターヴィスにやられ死にかけている司祭が許可など出せるはずが無いからだ。

この場に居るもの全てがそう思っているだろう中、フィアナはさらに続ける。

「教会がその交渉を飲むための条件——境界線の上の魔女、アニタ・レインフィールドがこの場で司祭を蘇生させる事。また、この件に關しての意義申し立ては司祭蘇生後に執り行い、万が一にも司祭がこの条件を拒否した場合には、あたしが司祭の命を奪いアニタ・レインフィールドの刑を執行する」

開いた口が塞がらなかった。

ターヴィスが襲ってきた直後、アニタには逃げるチャンスがあった。それなのにそれを妨害されたときは何を考えているのかと思っただが、フィアナはここまで予想していたのだろうか？ もしそうならば、策士にもほどがある。

直接逃がさないだけでなく逃げるチャンス奪い、交渉裁判は無理だと言っていたのにそれを強行する。しかも、万が一の場合に備え保険までかけて。

教会の兵がアニタの手伝いをするとは考えられないし、フィアナも恐らく手は貸してくれないだろう。何かを頼むとしたらフランとルークの二人。

これならば、助かるかどうかは本当に自分たち次第という事になる。

アニタはただ笑うしかなかった。

これが教会に魔女や悪魔憑きと言われたものではなく、本物の魔女の力なのかと。

この場に居た者が全員黙って立ち尽くす中、フィアナがアニタに問いかけてきた。

「で、やるのかい？ それともやらないのかい？」

この問いかけにアニタは一瞬間を置き、

「やります！ やらせてください」

「だったら、早いこと取り掛かるんだね。いかに境界線の上の魔女とえんど、所詮はただの人間。死んだ人間を生き返らせるなんて事出来やしないんだから」

フィアナの言葉が終わるよりも早く、アニタは司祭の下へ駆け寄り首筋に指を当てる。

かろうじて脈はあるが、いつ消えていくか解らないほど小さなもの。傷や出血量などから考えるに、あと一、二分で司祭の心臓は止まるだろう。

アニタは急いで司祭が持ってきたポーチの中身を確認する。

風邪などに処方する薬草の粉末から、手術道具一式。いつぞやルークに使ったのと同じものも数は少ないが入っていた。どうやら、司祭が抜き出したのは先ほど割ってしまったターヴィスの血を入れた小瓶だけ。

これならばやれない事は無い。

アニタはそう考えると、大きな声を出してフランとルークの二人を呼び寄せた。

「フランはこれと同じものを探してきて！ 出来るだけ早く」

そう言ってアニタがフランに渡したものは、白濁色の糸と薄紅色の管。神経と血管を繋ぐために必要な素材ではあるが、今ある分量だけでは絶対に足りない。

「ルークさんは手を貸してください！ 私一人じゃ時間がたりません」

そして、いくら材料が足りていたとしてもアニタ一人でやれる手術ではない。

アニタは二人に指示を出し終わると、司祭の方に目を向ける。す

ると邪魔をするように、フランが声をかけてきた。

「ちょ、ちょっと待てアニタ。こんなもん何処にあるんだよ？ 探すのにどれだけ」

「それと同じものなら、虫殻屋に置いている。本来医療に使うものじゃないから薬草なんかを取り扱ってる店にいつでも無駄足だよ」

慌てた様子のフランにフィアナが助け舟をだす。

「虫殻屋？ なんだよそれ？ どこにあるんだ」

「その角を曲がって真っ直ぐ突き当りまでいけば解る。坊やの足なら片道二分って」

フィアナから場所を聞いたフランは、話が終わる前にこの場を走り去っていく。

まさかフィアナが助言をくれるとは思わなかったが、これなら予想以上に早く着く。そう確信したアニタは、司祭の容態を確認する。すでに突き破られた箇所からかなりの血が流れていて、現在流れる血の量は大幅に減っている。とはいえ、これ以上血が流れてしまふと助かるものも助からない。

アニタはポーチからナイフを取り出すと、司祭の胸を服ごと豪快に切り裂いた。

「今から主要な動脈を全て結合します。ルークさんは余計な血が流れないよう止血しててください」

これ以上血を流さないため、アニタは異常なまでの速さと正確さで血管を繋ぎ合わせていく。

これにより徐々に出血の量は減っていくが、血液の補給が出来ていくわけではない。司祭はいつ出血によるショック死をしてもおかしくない状況。根本的な問題の解決はされていない。

アニタは一通り血管を繋ぎ合わせたところで、額の汗を拭う。

「ルークさん。ここを止めて置いてください」

そう言ってアニタが指示した場所は、心臓から肺へと血液を送り出す動脈。

本当ならもっと早く止血しておくべきだったのだろうが、他の部

位を後回しにするリスクを考えれば仕方のないこと。

ターヴィスに突き破られた司祭の右胸は、肋骨が肺に突き刺さりまともに機能していない。そんな場所を先に治療しては、余計な血を流す事になり司祭生存の確率がぐんと下がってしまう。

だから、手を加えるならこのタイミング意外はありえないのだ。

今ある道具と人手を考えるなら。

ルークが動脈を止めた事を確認すると、アニタは肋骨がささり破れている場所、そしてターヴィスが突き刺した箇所を躊躇いもなく切り落とす。そして、必要な箇所を器用に繋ぎ合わせていく。

しかし、その作業の途中で血管を繋ぐための管が底をついてしまう。

フランが戻ってくるまでにどれぐらいの時間があるだろう？ 一分か、五分か、それとも十分か？

ともあれ、どれぐらいかかるか解らないのであれば今している作業は中断しなければいけない。一分どころか一秒が惜しいのだからフランが走っていったほうにアニタは目をやってみるが、フランの姿は見えない。

アニタは肺に血が貯まらないか血管の場所を確認すると、ルークに新しい指示を出す。

「私の鞆に黒い皮袋が入ってます。その中身を血管を通して体の中に入れてください。私はルークさんが止血した場所の確認を」

そこまで言ってアニタは口を止めた。

ルークの腕前を実際に見たことがなかったため、ルークが処置した場所の確認をするという意味も込めて言った言葉。けれど、余計な心配だったらしい。

止血をしておいてくれと頼んだだけなのに、アニタが手を加えていない場所の血管や神経がいくつか結合されていた。

そのうえ、ルークが処置した場所に余計な出血は一切見て取れない。

止血と言う意味でも、適切な処置という意味でもこれ以上ない出

来。

「いえ、今のは取り消します。ルークさんは」

「遅くなった!!」

そこにフランがはちきれんばかりに物が詰め込まれた袋を二つ抱えて帰ってきた。

一つの袋には、白濁色の糸と渦紅色の管が大量に。

もう一つは袋の中には、黒く塗られた瓶が入っている。

「遅いよフラン！ 一体何してたの」

「悪い悪い。店主にそんなもん何に使うんだって足止めされてよ」

「じゃあ、それは？」

「ん？ やること店主に言ったらこれも持っていけって渡されたんだよ」

アニタはフランが持ってきた瓶を空に掲げ、光を入れて中身を確認する。しかし、瓶の中は全く見えない。

もしかと思ったアニタは、瓶の蓋を取り中を覗き込む。

そこにあったのは、ざわざわとうごめく闇。

アニタはすぐさま司祭の方を向くと、傷口から血を掬い取り瓶の中へぱたりと垂らし入れた。

すると、瓶の中に閉じ込められていた闇は静かに赤く染まってく。

「擬態虫か……それは？」

すると、それを見たルークが物珍しそうに瓶を覗き込んで尋ねてくる。

「はい。これがあるなら、血の心配はしなくても大丈夫そうです」

「確かにそうだな。珍しいものを取り扱っている……しかし」

アニタの言葉に頷きながら答えたルークは、フランの方に視線を向けた。

「これだけの量だ。高かっただろ？」

「いや、値段なんか知らねえぞ。後でお前が払いに行くって言ったからな」

それを聞いたルークの顔色が青ざめていく。

擬態虫が希少な虫であるという事はアニタも知っているが、市場に出回っているなど聞いたことがない。なぜなら、擬態虫は何にでも擬態することから見つけることが困難極まりないのだ。空気に光や闇、液体へと擬態している擬態虫を見つけることなど不可能と言っ
てまず間違いがない。

「今回はかりは仕方ないか…… 幸い金もいくらか余っているしな」
諦めるように呟いたルークは、アニタの方へ開いた手を伸ばしてきた。

「輸血は私がやる。君は処置の続きをやれ。こいつの心臓は今動いている事が奇跡なんだからな」

たしかにルークのいう事はもつともだ。こんなやり取りをしている間に司祭の心臓は止まってもおかしくない。けれど、その提案をのむことは出来ない。

「ルークさんの言い分は解ります。けど、その手を離されると肺に血が」

「輸血ぐらいなら片手でやれる。それとも、そいつに任せるのか？ 危ういにも程があるぞ」

アニタの言葉を遮り、ルークはフランの方を指差した。

輸血は簡単な作業だ。とはいえ、医療知識のないフランに任せることなど出来ない。

となれば、とるべき道は二つ。

ルークに片手間での輸血を頼むか、アニタがいち早く処置を終えその後に輸血を開始するというもの。

司祭の状況を考えればとるべき道がどちらかは火を見るよりも明らかだった。

「お願いします」

アニタは司祭の血へ擬態を始めている虫が入った瓶をルークに手渡した。

ルークが輸血の準備を始めると、アニタはフランが持ってきた薄

紅色の管を繋ぎ合わせなければいけない部分に急いでつけていった。

第四章 03

「ルークさん。もう手は離してもらっても大丈夫です」

途中から輸血を始めたせいもあってか、幸いなことにこれまで司祭の心臓は止まらなかった。だから、肺に血を流し酸素供給がきちんと出来るようになれば司祭の命は助かる。

アニタはそう考え指示をだした。

だが、ルークが手を離して数秒経ったとき悲劇は起きた。

長時間とまではいかないものの、止めていた血管部分に血栓が出来ていたらしく、それが血の循環を妨害していたのだ。

このままではきちんと血が流れないだけでなく、肺組織の壊死起こり肺梗塞になりかねない。最悪の場合、このままショック死してしまう可能性もある。

アニタは血が止まっている場所をすぐに探し始め、それを見つけると躊躇いもなくその部位を切り落とし即座に結合する。

一安心したアニタは、処置をした場所に血が漏れている場所がないから入念に探し始めた。

「腹部良し、胸部良し、肺も……大丈夫」

全ての場所で治療を終えたことを確認したアニタは、大きく背伸びをし息を吐く。

「後は胸を閉じれば終わりです」

ルークとフランに笑顔で言うつと、アニタは出来るだけ丁寧に胸の縫合を開始する。

そして、胸の縫合を終えフィアナに治療が終わった事を報告する。

「終わりました。これで命は」

「ごほう」

突如司祭の様子が急変する。

一瞬咳き込んだと思えば、それ以降ぴくりとも動かない。まさか
と思いいアニタは司祭の胸に耳を当てた。

「心臓が止まってる……」

今の状態で心臓マッサージは出来ない。

折れている肋骨がいくつもあり、せっかく固定したのが無駄になる。かといって、しないわけにもいかない。何もしなければ、司祭は確実に死ぬのだから。

アニタはどうしようか考えた挙句、一度閉じた胸部をもう一度切り開いた。そして、手で直接心臓をマッサージし始めた。

ゆっくりと、力強く。心臓や周りの臓器、血管を傷つけないよう慎重に。

そして、アニタが直接心臓をマッサージし始めてから五分が経過。お願いだから動いて」

そう思い握る力に緩急もつけてみるが、心臓が自立する気配はない。

これ以上続けたとしても司祭が蘇生する確率は限りなくゼロに近い。そんな考えが脳裏を過ぎり諦めかけたその時、アニタは誰かに腕を捕まれた。

「それ以上やつても無駄だ。代われ」

「無駄じゃない。絶対助けるんだから」

「それは解っている。だから代われと言っているんだ」

怒鳴りつけてくるルークに気圧されたアニタは、胸部から手を抜き取り袖で涙を拭う。

とはいえ、この状態から別の方法など考え付かない。心配停止状態になったときの対処法など、心臓マッサージ以外ありえないのだから。

「解りました。でも、どうするんですか？ 心臓マッサージ以外に方法なんて……」

「確かに旧式の医学ではそうだな。しかし、新式というか私の研究成果から言うと、別の方法がある」

そう言ってルークは銃のようなものを懷から取り出し、アニタに見せ付けてきた。

「銃なんか使ってどうするんですか？」

「撃ち込むんだよ」

「な！？ そんなことしたら」

「良いから黙ってみてろ」

ルークはアニタの静止を振り切って、司祭の胸に銃を当て引き金を引く。

バチンという音と共に、司祭の身体が跳ね上がった。その直後にルークが司祭の胸部に手を突き入れる。

「考えたくはないが、これで動かなかったら……」

そこまで言ってルークは司祭の胸部から手を抜き出し、親指を突き立てて拳を握る。

「鼓動再開。これで大丈夫だろ」

アニタは司祭の心臓が本当に動き出したのか確認する。すると微弱ではあるが、確かにとくんとくんと脈打っている。

「どうして？」

アニタには意味が解らなかった。

なぜ銃で司祭を撃った後に心臓マッサージをしたら、心臓が動き出したのか。

「さっきのは電気銃だ。試作品だから大した威力はないが、そのおかげで役に立った」

ルークの言葉を聞き、アニタはますます意味が解らなくなる。

確かに不整脈等が起き意識がなくなったときに電気ショックは有効だ。しかし、心臓が止まってから五分以上が経ったあの場で役に立つとは思えない。

とはいえ、司祭が助かった事に変わりはない。アニタは急いで司祭の胸部を縫合した。そして、消毒も兼ねて磨り潰してどろどろになった薬草を司祭の胸部へ塗りこんでいく。

その後べたべたになった手を鞆から取り出した布で拭くと、アニタはフィアナに報告する。

「先ほどのように容態が急変しなければ大丈夫です」

アニタから報告を受けたフィアナは、司祭の隣まで来ると脈を確認し司祭が生きていることを確かめる。

「確かに生きている。見事な手術だったよ」

アニタに賛辞の言葉を送るフィアナ。だが、それを聞いた兵の一部が黙っていなかった。

「ふざけるな！ そいつは命を操る魔女なんだぞ！？ 助けられて当然だろう」

怒鳴りながら言う兵を見て、フィアナは大きな声で笑い出した。

「何を言っているんだい？ この子の首元を見てみる。この馬鹿がつけた魔術を封じる首飾りが付いているじゃないか。あんたはこの状態で魔術を使ったというのかい？」

この言葉に兵は誰一人として言い返せない。

中には事情を知っているものも居るだろうが、ここでそれを言うてしまえばアニタが魔女でない事を認めることになる。それだけは絶対に避けなくてはいけない。

魔女でないただの人間を魔女として殺そうとしたなんてことは、教会の立場として広まってはいけないから。

「文句のあるやつはいないね？ いないなら、これにて境界線の上の魔女、アニタ・レインフィールドの公開処刑を中断する。兵どもとオルブライトの坊やはターヴィスの後始末。リヴィングストンの坊やと境界線の上の魔女は怪我人の治療にあたりな」

こうして、観衆をも巻き込んだ境界線の上の魔女の公開処刑は、フィアナの取り仕切る中幕を閉じた。

交渉裁判の結果がでるまで街から出ることを禁じられたアニタたちは、監視という意味を込めてフィアナの世話になった。

そして司祭が目覚めると、フィアナが交渉裁判の内容を告げに行った。

アニタたちの考えでは難色を示すだろうと思っていたが、事の一部始終を聞いた司祭はあっさりと首を縦に振ったらしい。

しかし、フィアナによるとこれには大きな理由があったとのこと。教会はアニタの魔力を抑えるためにという名目で首飾りをつけさせていた。けれど、アニタはその首飾りをつけたまま手術を成功させている。このことが、アニタが魔女ではなくずば抜けた技術を持った人間のたと証明することになった。

その上、街の住人から司祭への批判も上がっており、難色を示すなんてことは出来なかったらしい。

その時に聞いた話によれば、アニタの首飾りの件や、魔女としての証拠になるという理由で持ち物を持ってこさせるよう仕組んだのも、フィアナだというのが驚かないわけにはいかない。

「しかし驚きだよな。あの婆にそこまでの権力があつたとは」

「失礼だよフラン。フィアナさんが居なかったら、今こうしていられなかったんだから」

「それはそうだけどよ、なんであいつはあそこまで肩入れしてきたんだ？俺とルークが払った物に対しての対価は別のものだったんだぞ？」

「あはは。なんでだろうね？」

フランとルークが支払った対価。絶対に聞いたことを言わないという約束で、アニタはフィアナから内容を聞いていた。

まず、ルークが支払った物はロンド金貨五十枚に命を捨てる覚悟。次にフランが支払った物は、他の全てを敵に回してもアニタを助けないという覚悟と、命を捨てる覚悟。

これにより得た対価は、アニタの刑が執行される順番や日時を先に教えてもらい、助けるための計画を潤滑に進められるようにするというもの。

フィアナが言うには、教会が用意してきた物が金貨だったため、判決を覆すには教会が用意した以上の金貨を支払うしかなかった。だが、別のことに對してなら天秤に乗せる物はなんでも良かったら

しい。

そして、それが今回の結末を招く結果となった。
元々フィアナが教えた情報には、フランが命を賭けることは含まれていなかったという。

だからフィアナは、天秤の重さを整えるためにアニタの元へ来たのだとか。

とはいえ、あの場で自らが無限の蜘蛛の女王だと名乗るつもりも無かったらしい。

偶然にもアニタがそれに気付いてしまった事により、フィアナは大きく動かなければいけなくなつたと言っていた。特にターヴィスの群れを集めてくるのには一苦労したそう。

こんなくだらない話をしているうちに、アニタたちはいつの間にかレノンの出入り口にたどり着いていた。

「ここまでで構いません。ありがとうございました」

「世話になつたな」

街の出入り口まで案内してくれたルークに、アニタは頭を下げフランは手を上げて礼を言う。

「かまわんさ。元々は俺のせいだからな」

「そ、そんなことはありません。それにほら！　ちゃんと資格ももらえましたから」

申し訳無さそうにするルークに、アニタは慌てながら答える。

確かに元を辿れば今回のことはルークが原因かもしれない。けれど、村を出ようと思つたのはアニタ自信の意思だった。このことでルークを攻めるなんて事が出来るわけが無いのだ。

「全く……キミには頭が上がりんな。最初の印象と随分変わったものだ」

「最初の印象？」

「ああ。人見知りで恥ずかしがりやというのはどこにいったんだ？
今では帽子も被つてない」

「もつ……酷いですよルークさん」

笑いながらのルークの言葉に、アニタは顔を覆い返事をする。

確かに、村に居たときと比べれば人見知りや極度の恥ずかしがりやなところは改善されたといえる。その理由については、アニタも薄々ではあるが理解しているつもりだ。

誰であるかと、あれほどの罵声を浴び晒し者にされれば日常生活で恥ずかしいのだと言わなくなる。あのような状態に置かれれば、アニタのように強く成長するか精神的におかしくなるかのどちらかしかないのだから。

「すまない。しかし、その反応を見る限りでは大丈夫そうだな」

「はい。でも、魔女と言われるのはやっぱり嫌です。そう言われて助からなかった人が大勢いるわけですから……」

「そうだな……だが、キミはもう医者。誰が何と言おうとだ。他人からの呼び名など気にせず自分の夢に向かって突き進めば良い」

「解りました。ルークさんの夢も叶うと良いですね」

二人が笑顔で言い合うと、アニタとルークのやり取りを見ているのが辛くなったのか、それとも早く街を出たいだけか。フランが不機嫌そうに口を開いた。

「いつまでやってんだそれ？ いい加減行こうぜ」

せかすように言い、フランは一人で街を出て行く。

「ちよつとフラン！ 先に行かないでよ」

フランに止まるようアニタは言うが、フランは手を上に上げるだけで止まろうとしない。

「えつと、ルークさん本当にありがとうございました。次がいつになるか解りませんが、もう一度会える日を楽しみにしています」

深々とルークに頭を下げると、アニタは走ってフランの後を追いかけた。

街を出てしばらくすると、今まで話しかけても黙り込んでいた

フランが唐突に話しかけてきた。

「そっぴゃ、あの話覚えてるか？」

「あの話？」

「アニタが簡易的にやる治療がどんなレベルかってやつ」

そう言われアニタは苦笑する。

司祭との交渉が無事に済んだ後、医師としての資格をもらうことができた。しかし、その時に言われた事を忘れる事など出来ない。

『持ち合わせの道具であそこまでの手術が出来る物など他に存在しない。境界線の上の魔女どころか、キミは世界一の医者だよ』

つまり、フランの言っていた事は間違っていなかったのだ。

「で、これからどうするんだ？ 行き先決めない事にはどうしようもないだろ」

「そうだね。とりあえずは村に戻ろうかなって思ってる」

「なんでだよ？」

「一応報告しておかないとね。皆心配してるだろうし」

今回の事件は、レノンだけの問題ではない。

魔女と名の付く物が教会に認められた最初の例。

噂は瞬く間に周辺の村や街に広がっており、アニタやフランがいた村に届いていないという事は無いだろう。そうなれば、境界線の上の魔女、アニタ・レインフィールドの名を聞いた村人たちはどう思うか？ 心配をかけないためにも一度戻って挨拶しておく必要があるとアニタは考えていた。

「それもそうだな。じゃあ戻るのは良いとして、その後はどうするんだ？」

「世界中を回りたいな。助けられる人がいっぱいいるだろうし」

「そりゃ苦労しそうだ」

「あはは。なんでフランが苦労するの？ 私一人で行くんだよ」

笑いながら言うフランに、アニタも笑って返す。

今の言葉の意味が解らないほどアニタは鈍感ではないが、これ以上迷惑はかけられない。そう思い出した言葉。だが、それを聞いた

フランは本当につらそうな顔をしてアニタを見る。

「泣けてくるぞおい。アニタ一人で旅なんてさせられると思うか？」

迷惑ばかりかけていられないから。本当はこう言いたかった。しかし、アニタの口から出たのは別の言葉。

「……着いて来てくれるの？」

「おう！ どこだって行つてやるよ」

「地獄の底でも？」

「当たり前だろ！ 閻魔大王もボコボコだぜ？」

満面の笑顔で言うフラン。

アニタは零れ落ちそうになる涙を堪え、最高の笑顔で笑う。

「ありがとう」

終章

「乾杯ーッ！！」

パチリと乾いた音を立て暖炉の火が爆ぜたのを合図に、丸い机を囲むように座った三人は声を揃えて手に持った器を突き合わせた。そして、フランとルークは麦芽酒を競うように一気飲みし、アニタは薄いぶどう酒を一口だけ口に入れる。

元々アルコールが得意な方ではないアニタだが、二人が美味しそうに飲む姿を見れば少しぐらい飲むのも悪くない。そんな風に考えてしまうのは無理もないこと。アニタがぶどう酒を一口飲み終える頃にはフランとルークは揃って麦芽酒の入った器を空にしているのだから。

「にしても十年ぶりぐらいか？　こうやってお前たちと卓を囲むのは」

「そうですね。あの時は色々大変でした」

「大変ってアニタ……よく笑いながらいえるもんだと、おやじ！　麦芽酒二つ追加な」

話をぶった切り酒を追加するフランに二人は笑い声をこぼす。

あのときの出来事を考えれば、今こうして笑っていられるのは奇跡に等しい。今ある幸せを実感しながらアニタはルークに視線をやった。

「そう言えばルークさん。どこに行っても名前を聞きますよ。稀代の改革化ルクレシーヤス・リヴィングストンって」

アニタの一件以来教会は考え方を変え、今まで魔女や悪魔憑きとしていた卓越した技術を持つ者たちを徐々に認めるようになっていた。

しかし、教会が認めると言うのはその者が持つ技術や知識が他の人物にも扱える事。つまり、他の誰にも出来ない事は魔女や悪魔憑きの使う魔術として扱われ、誰か一人にでもそれが出来た場合ただ

の技術や知識として扱われるようになる。

もちろん、他を卓越した技術や知識を持つ者の業など一般の人間に使えるわけがない。教会もそれを見越して条例を作ったわけだが、そこに誤算が生じた。

魔女や悪魔憑きと呼ばれるものを救うために、ありとあらゆる技術や知識を一人で抱え込んでいたルークは、原理を聞くやあつという間にそれを再現して見せた。しかも、それらを簡略化し一般の間でも扱えるように改良まで加え始めたのだ。

これにより、魔女や悪魔憑きと言われるものたちは激減し、ルークは稀代の改革化などと呼ばれている。

「それを言ってしまったえば、君もそうだろう？ 唯一誰にも真似できない技術を持ち、魔女の名を与えられているにも関わらず教会に認められた神医——アニタ・レインフィールドを知らない人間はこの大陸に居ない」

「そうだぞアニタ。お前はこいつより凄いだから、もつと自信を…… あつ！ これと同じもの追加で」

再度話を打ち切ったフランを見てアニタとルークは苦笑する。この短い会話の間にどれだけの量を食べたのか、机の上に並べられていた料理の半分は無くなってしまうっている。

「…… お前は全く変わっていないな」

「そうでもねえ。医術だけならお前より上だ」

一向に食べるのを止めないフランにルークが呆れながら言うと、フランは残っているものに手を伸ばしながら答えた。

確かにアニタから見てもフランの医療技術は並外れている。分野によってはアニタのそれすら凌ぐだろう。しかし、苦手な分野の治療はさっぱりなのだ。全てにおいて元魔女や悪魔憑きと同じレベルのルークと比べるのは無茶がある。

負けん気の強い二人の事、また昔のように言い争いになるかもしれない。そんな風にアニタは考えたが、十年という歳月は人を成長させるには十分だったらしい。

「なるほど。彼女の傍に居続ければそれも当然か」

ルークは納得しながら、いつの間にか届いていた麦芽酒を口に運ぶ。そんなルークを見て、フランは詰まらなさそうに麦芽酒を一気飲みし器を机に叩き付けた。

「なんだよ……随分丸くなったなあ前」

「お前と違って落ち着いてもいい頃合だろ？　いつまでも馬鹿ばかりは言つてられん」

「そうか……そっぴいやお前、もう三十四になるんだったな。見た目があれだからすっかり忘れてたわ」

大きく声をあげてフランが笑うと、どことなくルークは不機嫌そうになる。いくら歳月がたったと言えど、抑えられるのは感情だけで理性的な部分までは変えることが出来なかったのだろう。こうやって見てみると、先ほどのやり取りも落ち着いたルークなりにフランに噛み付いていると言えなくも無い。アニタはそんな二人を見て、思わず笑い声を漏らしてしまう。

「二人とも変わってないね」

その言葉に、フランとルークは机を両手で叩きアニタの方へ勢いよく振り向くと、揃えて声をあげた。

「そんなことねえ！！」

「そんなはずは無い！！」

やはりこの二人は、生き方こそ違うが似たもの同士だ。十年前に感じた事は間違っていなかった。

「そういう所が変わってないんだってば」

アニタが口元に手を当てくすくす笑いながら言うと、フランは新たに麦芽酒を追加しルークは残っていた物を一気飲みする。

それから少しの間、フランとルークは大人しくしていた。だが、アニタが十年間の思い出話などを始めると、それにフランが乗り始めた。その後はルークも自分のしてきたことを話、あっという間に四時間近い時間が流れていく。周りを見てみれば、残っている客は三人だけになっていた。

「もうこんな時間か……随分話し込んでいたようだな」

懐中時計を見て時刻を確認したルークは、椅子を後ろに下げ立ち上がるうとする。

「ですね……そろそろ帰りましょうか。お店の人にも悪いですし」

「ちょ、ちよつと待てお前ら。まだ頼んで無いものがあるだろ」

アニタもルークに続いて立ち上がるうとすると、慌てた様子でフランが口を開いた。

頼んで無いものと言われても、店にある料理のあらかたはフランが頼み尽くしている。その上、いつぞやフランとルークが約束していた『きつい酒を飲みながらうさぎ料理を食べる』というのも既に実行されているのだから、これ以上何を頼むのか……。

アニタは首を傾げ、ルークも怪訝な目でフランを見る。

「な、なんだよその目は！？ アニタはともかく、お前忘れたんじやないだらうな？」

「忘れた？ この場で忘れる事があるとすれば、きつい酒にうさぎの肉だらう？ きつい酒もうさぎの肉も食べたではないか」

「何寝ぼけた事を言っただお前は？ ユーステルムできつい酒と言えば火炎酒。うさぎ肉と言えばアレだらう。なあ、おやじ！」

ルークを罵った後、フランは店主に物を持ってくるように頼む。すると、三十秒もしないうちに、酒と何かを盛り付けた皿が運ばれてきた。

「綺麗……」

「これが……うさぎの肉か？」

「正真正銘うさぎの肉だ。真珠うさぎってやつらしい」

アニタとルークは驚愕せずにはいらなかった。運ばれてきたそれは、皿に盛り付けられたうさぎの刺身。しかし、そこに盛り付けられているのは赤身でも白身でもない。まるで氷でも乗っているのではないかと思わせるほど透明で透き通ったそれは、室内の灯りに照らされキラキラと輝いて見える。

「じゃあ、何に乾杯する？ やっぱ十年ぶりの再会か？」

驚いている二人を他所に勝手に話を進めるフランにさせられ、アニタは思わず頷いてしまう。

とはいえ、最初の乾杯のときに何かを言ったわけでもないで無難な選択。頷いた事に対してやってしまったという気持ちは一切無い。アニタは新たに運ばれてきた果実汁を、フランはうさぎ肉と共に運ばれてきた火炎酒に手をかける。そして、乾杯の音頭をとろうと器を掲げた。

「十年ぶりの」

「ちよつと待ってくれ」

しかし、ルークがフランの言葉を遮り口を開く。

「なんだよ……空気読めって」

「それについては謝る。だが、ここは私に言わせてくれないか？
今だからこそ言える、もつとも相応しい言葉があるんだ」

「なんだよそれ？」

「聞いてからのお楽しみだ」

こほんと咳払いをするとルークも火炎酒を掲げ、

「私たちの転機、境界線の上の魔女に――」

教会にされたことを忘れたわけではない。けれど、あの事件があったからこそ卓越した技術を持つものが魔女で悪魔憑きで無くなった。つまり転機という意味なら、この三人だけでなく全ての魔女や悪魔憑きと呼ばれたものに対して言える事。

本当にルークは上手い事を言う。

そんなことを考え、アニタは頬を緩ませながらフランの方を見た。すると、フランも同じ事を思っているらしく、やってくれたと言わんばかりに笑みを浮かべている。

だからアニタは、心置きなく声を出した。

過去に捕らわれているのではなく、自分の夢のため前を見続けるために。

『乾杯ーッ！！』

終章（後書き）

これにて、境界線の上の魔女はお終いです。

電撃小説大賞一次落ちという事もあり完成度の高い作品ではありませんでしたが、読んでくださった方々ありがとうございました。

投稿している間に読み直し、死にたくなること数回……

よくもまあこんな駄文を送りつけたものだ、自分を褒めてやりたい気分です。

ここはこうしたほうが良いのでは？　と言う場所が大量発生していきますから。

推敲はきちんとしましょうという悪い例。

別の作品を投稿する機会があるとすれば、他賞で落選したときだと思います。

当面の目標がGA文庫大賞で受賞することなので、ここではない別の場所で作品をお見せする事が出来るようにしたいと思っています。とは言っても、このレベルでは無理なので精進しないといけません。

ともあれ、境界線の上の魔女を見てくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4672m/>

境界線の上の魔女

2010年10月8日12時22分発行